

つくることを考えてみよう

地域を 生きる

ひとりひとり簡単なふたりにならな
ひとりひとり簡単に出会うとき、
ひとりひとりだから手をうつな作
ひとりひとりたかいたか自分を見つけて
ひとりひとりやるを此の自分を見つけて
ひとりひとり始まる明日は
ひとりひとり昨日から生きている
ひとりひとり夢の話をして
ひとりひとり夢の話を
ひとりひとり夢の話を
ひとりひとり夢の話を
ひとりひとり夢の話を
ひとりひとり夢の話を
ひとりひとり夢の話を
ひとりひとり夢の話を
ひとりひとり夢の話を



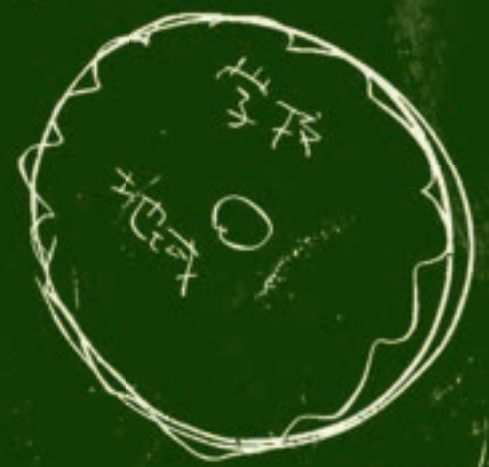
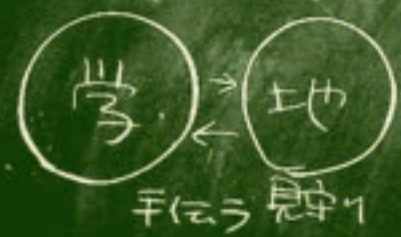
Ⅳ Ⅰを通じて学校と地域との 未来

1. さいしよに本日のこと
2. 事例 ①
" ②
3. 原野さんと
地域で活動すること
4. 皆さんとごいかに。

今日の活動

を考えた?

活動の流れ



つくることを考えてみよう
地域を生きる

| | |
|-------------------------------|----|
| 0 はじめに——なぜ地域なのか？ | 2 |
| 1 地域を知る——「知る」とは何か？ | 4 |
| ・アーティストの気つきを通して、地域への新しい視野が開ける | |
| ・学校との関係を地域の視点で知る・考える | |
| 2 調べるって？ | 7 |
| ・物語の地層をめぐる〜図工研究会 | |
| ・調べたこと、見つけたもの・ことを構造化し、探求する | |
| 3 きっかけについて考えるやってみる | 11 |
| ・さすらいの竹林が図工と出会っ〜その1 | |
| ・さすらいの竹林が図工と出会っ〜その2 | |
| ・身近な植物から色を抽出して絵の具をつくる | |
| 4 つながりをつくる、育てる、引き継ぐ | 16 |
| ・そこにある歴史と資源に気づく〜縄文ハウス | |
| ・地域の施設とつながり、育む〜ハンセン病資料館の見学から | |
| ・国語+マタギ+造形による知覚の拡張 | |
| ・桑の葉染めで総合学習〜大学との連携 | |
| 5 振り返る | 22 |
| インタビュー | |
| ・真砂野裕（昭島市立光華小学校校長） | |
| 「風」を吹かせることが学校の仕事 | 24 |
| 猪瀬浩平（文化人類学者） | |
| 「答え」がない場所で、折り合いながら生きていく | 28 |

はじめに——なぜ地域なのか？

宮下美穂（特定非営利活動法人アートフル・アクション）

図工室の自治、地域の自治

図工には、算数や理科などの教科のようなわかりやすい正解はありません。一人ひとりの子どもが、その子の持っている何かを総動員して造形し、描画するとき、どの道具を使うか、どの色を使うか、考える間もなく身体が動くことがあります。あるいは熟慮の末に選択することもあります。その過程はさまざまですが、いずれにしても、二度とは起こらない出来事であり、そこで生まれるものは世界にひとつしかないものです（本来は、例えば算数であっても子どもの人數分の解があるはずですが）。

思いがけず降ってきた雪に触れ、そこに絵の具をたらしてみたりは、きつと考えるより先に身体が動いたのでしょうか。水っぽい雪が絵の具を吸収し、じわじわと広がっていくのを見て、今度は絵の具がついた雪を紙の上に転がしてみる。偶然とも必然とも分けられないさまざまな出来事が、それぞれの子どもとの認識／気づきの回路を、複雑に、豊かにします。

子どもたちは、持てるものを使って、あるいは身のまわりにあるもの、湧いてきたアイデアで自分の表現を推し進めていきます。自分自身の感覚を投企して（未来に投げかけて）選び取っていきます。誰かに教えられたことではなく、無自覚であっても、その子の中から湧き出てきた選択です。むしろ、無自覚であるからこそ、原初的でリアルでもあります。その結果生まれてきたものは、もはやその子自身であるとも言えるでしょう。

これを「自治」と考えてみたらどうでしょう。自治は自己決定や自己責任、課題解決とは少し異なるように思います。もちろん、自分で雪玉を紙の上に転がした結果は、その子の選択によるものです。しかし、意識するとせざるに関わらず、ひとりの子どもが何かを選び身体を動かすことは、決定や責任とは違う、それ以前の過程です。故に、その過程自体がおかしがたくその子ども自身であり、尊ばれるべきものだと考えられるでしょう。それは、グループワークで相談をしながら活動するときにも同様で、揺れ動く目的や目標に向かってそれぞれが自分を差し出していきます。社会的な課題に取り組むわけではないですが、そうした行為が誰かに指示されたり教えられたものではなく、子ども自身からおのずと生まれるものであるとしたら、それは「自治」の種に近いのではないのでしょうか。

一方、地域の自治はどうでしょう。

ひとことで「多摩地域」と言っても、東西南北で地勢は異なります。先の戦争の前までは、おそらくそれぞれの地域に合わせた土地利用や生業があったはずですが、しかし今日では、それらもとより土地の気候風土やそれに根差した生業も、生業に由来していた組合や団体、そこでのものごとの決め方・決まり方、あるいは助け合いの伝統も、すっかり消え去ろうとしています。また、かつてはそれぞれに固有の風土、地勢、生業が地域の文化も育みました。獅子舞などの祭りや年中行事があり、鍛冶屋や左官屋が刻むリズム、山間地に行けば、森で木を切る音もしたでしょう。街中には豆腐屋や味噌屋、今や死語となっている荒物屋などが軒を連ねていました。それらが大量消費社会の中で消滅し、ロードサイドの大型店、ひいては注文翌日によってくる通信販売に取って代わるにつれ、暮らしは均質化し、そして子どもたちの生活経験は貧弱になりました。

整序された住宅地はアスファルトやコンクリートで覆われ、家々は塀で区画されました。公園や河川敷も禁止事項が多く、公（おおよけ）のものであっても、一人ひとりの市民には、そのありようへの関わりしはありません。原っぱや路地などの曖昧な場所は姿を消し、我が事以外にはなかなか関心も払われないのが実情ではないでしょうか。決め事は行政が行い、私たちは自分の暮らす場所の未来について考えることを手放してしまつたのです。

関係性も均質化しています。障害がある人は障害者の施設に、高齢の人は高齢者のコミュニティに。少しでも考え方や体格、生活スタイルが異なると、それは違いとして「分類」されます。

かつての隣組や自治会組織があればよいということではありません。しかし、自分の暮らす地域を知り、異なる個性が集まり、それをよりよいものにするための役割をそれぞれに応じて分担していくことは、昔に戻ることではなく、これからの地域社会に必要な営みと言えるでしょう。

後出の昭島市立光華小学校の眞砂野裕校長は、多様な性の相互承認が重要なと言われる今の時代、学校だけでは立ち行かなくなっていると指摘されました。学校は、教室のドアを閉めてしまえば、大人ひとりと子どもだけの世界であり、そこには学校の文化を邪魔されたくないというような感覚、小さなプライドのようなものもあります。それではもう生き残っていけないし、何より子どもたちはこれから多様性の社会に入っ

ていくのだから、学校に多様性がなければいけないと言います。地域と学校の関係には、どのような可能性が考えられるでしょう。

学校と地域が協働すること

では、図工／学校と地域はどのような関係を形づくるのが可能なのでしょうか。あるいは求められているのでしょうか。

単に、地域から何かに長けたゲストティーチャーが学校にやってくる、学校は教えを乞うという枠組みだけが協働や連携ではないように思います。学校と関わることが、地域にとっても将来を考えるきっかけにならないでしょうか。あるいは地域の課題とともに考える主体にならないでしょうか。

かつて、多摩地域の図工専科の河野路先生は、「子どもたちを地域に還す」と話しました。子どもを学校の中に留め置くのではなく、図工やその他の授業を通じて、地域とのつながりを再生し、地域との関係の中に還していく。それは日常の生活を送る場としてのことだけではなくありません。子どもたちが地域のひとりとして、もし将来はその地にいなかったとしても、地域のことをともに考え、ともに取り組むことは、子ども自身の生きる場所が広がることを意味します。子どもや学校が抱える課題、地域の課題を両者で考えてみたらどうでしょう。学校と地域の浸潤し合う双方向性のある関係は、どちらにとっても、自らの将来を自ら考えていくための好機となるように思えます。

図画工作は、アイデアを練り、企画し、道具や技術を想定し、かかる時間、自分の技量、友達のアプローチをヒントに総合し、生まれてくるさまざまなものと応答しつつ、失敗も含めて自分の手と目と身体全体で学びを進めるものです。この行程は図画工作だけのものではなく、ほかの教科も含めた全ての学びの基礎にもなります。情報を教え与えられるだけでなく、自ら知ろうとする中で得られたものごと、知識、発見を整理し、分類し、構造化する（関係付けてみる）ことは、ごく小さい頃の遊びにも無意識に内在します。好奇心を持って身体を運ぶことで、発見はどんどん拡張します。学ぶこと／遊ぶことが生きることそのものになるのです。小学1年生は1年生なりに、6年生は6年生なりに、経験や身につけたものを用いながら、自らの生きる道筋を探り、気づきを更新していくでしょう。

NPO法人アートフル・アクションでは、15年間の活動期間の中で、多くの小学校の図工や教科の授業と

連携しています。授業にはたくさんの方々の市民の方々とNPOスタッフ、アーティストが参加しています。

この冊子では、企画づくりや授業に参加したスタッフが、地域との連携を視野に入れながら、連携の考え方や授業のプログラム、やってみた様子などを振り返ります。

もちろん、唯一の正解などというものはありません。まずは子どもたちが暮らす場がどのようなものがあるのか、関心を持ってみることで、そして地域を知ること、調べることで、協働の授業をやってみること、やってみたことを次に活かすための振り返りを例に、協働の可能性について考えてみたいと思います。取り上げた活動には、まだ地域の課題を学校の課題と接合させる、あるいは学校と関わることを通じて地域のことを地域の人が決めるといった動きまでは見られないでしょう。しかし、その萌芽のようなものは感じられると思います。

また、現場の先生が学校と地域との関係をどのように考えているかについて、昭島市立光華小学校の眞砂野校長にお話を伺いました。同様に、地域が今、どのようなことを課題と感じているのか、学校も含めた「人が生きる場所」について、学校と地域がともに考える場を構想できるのかを、文化人類学者の猪瀬浩平さんに伺いました。

コミュニティスクールの制度も、ベクトルは「地域から学校へ」の一方に止まっています。学校、地域というふたつの円が、交わるのか交わらないのかではなく、重なり合い有機的に関係し合う形を模索したいと思います。

そこで、学校と地域を、例えば学校は勉強をするところ、地域は生活をするところ、働くところなど機能や役割で分けるのではなく、少し唐突ですが、学ぶことと育つこと、生きること、広義のケアと捉え、地域のあり方についてそこから改めて考えてみたらどうでしょう。ここではケアを「介護」や「障害」への対応といった支援としてのみ位置付けるのではなく、地域社会の中で、さまざまな関係性をベースにしたコミュニティのあり方と考えてみます。

そのような中で、子どもたちを含む多様な地域の人たちが、自分たちの暮らしを成り立たせているさまざまな関係性、共感や共感に基づくルールのようなものを醸成させつつ、それぞれの暮らしに関わる選択を行ったり、暮らしをつくり出していく。そのおおもとなるのが、協働がもつ可能性です。地域で生きる多様な方々の対話のきっかけとなれば幸いです。

地域を知る

——「知る」とは何か？

何かを知る、とはどのようなことでしょうか。

学校の授業などで遭遇する「知る」は、どちらかというところある事柄に関する知識を体系的に理解／記憶し、それをほかのことに援用したり、比較したりしつつ、その体系をより確かなものにし、ものごとを決めたり、ものをつくったりするのに役立てていくことかもしれません。例えば化学の授業で、対象となる物質の性質を理解し、実験をしながら、その物質の変化についての体験を増やし、化学的な製品をつくるなどは、それにあたるかもしれません。

一方で、同じ知識を得ても、誰もが同じことができるわけでもありません。例えば、木彫の作家が硬い木を斧やノミで刻む行為を何度も繰り返していく中で、木の特性やその木にだけ備わった癖に気づき、応答しながら、木が教える形への道を彫り進むことは、その彫刻家とその木の間だけに起こる出来事でしょう。「知る」には、そのような経験も含まれるように思います。桶職人が何度も鉋で木を削る経験を通して、塩梅を会得し、目を瞑っても、この木ならこのくらい、という仕事ができるようになることも、もしかしたら「知る」ではないでしょうか。

この「知る」は、学校で教えられることと少し違っていてもいいかもしれません。しかし、あるものごとや出来事と出会い、それがどのようなことであるかを感じ得るために、一人ひとりがその人だけの経験や体験に相対し、自身の目や身体で理解しようとすることも、知るために大切な姿勢ではないでしょうか。

したがって、「知る」ことは、その人に固有の経験であり、何を知り得るか、という意味で、その人自身が試されることなのかもしれません。既存の知識や方法論に拠らずに、自身の身を投じてのみわかることがあり、対象と応答する「私」だけが見ることができものがあ、その人によって「知る」ことが定められていきます。

「知る」ことを、知識の集積とだけ捉えず、自分の経験や体験、興味に沿って能動的に、見えるべきことを見えるようにすることと考えてはどうでしょうか。まずは「見る」ことも、ひとつのものごとを知ることと言えるかもしれません。

民俗学者の宮本常一は、民俗学を研究する人たちが、たくさんの旅を通じて研究や考え方を深めていった、そこに美感による比較が起こつてくると書いています（『ふるさとの生活』講談社学術文庫）。旅はひとつとして同じものではなく、その人にしかできないことでもあります。そこで知り得たことは、それを選び取り獲得するその人自身でもあり考えられ、尊ばれることとも言えるでしょう。

アーティストの気づきを通して、 地域への新しい視野が開ける

2023年冬、奥多摩町立氷川小学校に、60日間アーティストが滞在しました。山間の小さな小学校です。日ごろ目にしない大人が学校や町に滞在することで、子どもたちが見慣れた空間に新しい眼差しを向けることができるのではないかと意図しました。アーティストが学校に入る際には、例えば全校集会などの際に、子どもたちに「このため」「アーティストが」という紹介はしませんでした。小さな町の学校に知らない人がいる、という体です。

アーティストは制作のための目的を設定して何かをつくるのではなく、町にある短期のシェアハウスに住み、学校に通いました。海育ちのアーティストが、東京にしては急峻な山の風景を新鮮に捉え、町の人にとっての当たり前の風景に光をあて、意味を付与しました。風景や町の様子を見ながら、彼自身の制作を進め、5年生を除く各学年が参加し、「山結い」という作品が生まれました。川に石を拾いに行き、石を洗ったり、並べてみたりを繰り返し、最終的に作品として校舎2階の各教室に、この町の大きな特徴である山の稜線が現れました。いわゆる交流授業と銘打ったプログラムではなく、作品の位置付けなども

曖昧なまま。でも、子どもたちは何かしらを受け取り、受容しました。

5年生は、6年生になった初回の写生の授業で、アーティストの作品を鑑賞し、それを踏まえて自分の、この町の春を描きました。普段意識することのない、生まれたときからずっと見ている山の稜線を改めて見つめることで、町の捉え方が少し変わりました。ア



春の図工の授業。先生からは「昨年滞在制作をしたアーティストは、学校の窓から見える山の稜線を表現したね。君たちにとっての奥多摩の春を君たちなりの方法で表現してください」というお題が。子どもたちからは、いわゆる写生を超えて、自分でつかまえた春が生まれた。

学校との関係を

地域の視点で知る・考える

いきなり「学校と関わってください。手伝うだけでなく、ご自身の地域で暮らす中で感じる問題意識を持って集まってください」と言われたら、保護者だって、もともと学校と関わり合いのあった人だって、尻込みするでしょう。そこで私たちは、教える・教えられる、手伝う・手伝われるではない、一緒に考えてみることを目指したミーティングを実施してみました。

2024年の冬に行った小金井市立第四小学校の「竹取物語」の授業。それを保護者と地域の人たちが「手伝う・手伝われる」関係を超えて、ともに地域のこと、子どもたちのことを考える機会とするために、関わり方、実

施の仕方、そもそも地域とは何か？を話し合った事前ミーティング／ワークショップです。また、近所のお寺や神社に竹を譲ってもらうに行き、それを授業で使うことから、竹を知る時間も設けました。

図工専科の先生が、地域との窓口から調整までひとりで行うことには、質、量ともに無理があるのは自明です。そこで、講師や専門家がなくても、参加した大人が安全管理や材料の調達などを自分たちでマネジメントできるようにすることもひとつのテーマでした。

まず、地域について考えてみるひとつのヒントとして、「公(おおやけ)」と「私(わたし)」



の関係のあり方について取り上げてみました。題材にしたのは、『いっぽんの木』（月刊かがくのとも 1994年6月号 福音館書店）です。出版社の紹介には「街のなかの大きな木が切られてしまいました。／なんとかこのまま残したい、だめでも、どこかへ移植したいとの、みんなの願いもむなしく……。／この木を大好きだった人たちが、切られた木をもらいうけ、枝を、葉を、幹を、もちかえりました。／この木への思いをこめて、みんなが何かをつくろうと約束したのです。／人と自然（木）との交流を考える写真の絵本」とあります。

個人の敷地に生えている木は、一般的には個人のもので捉えられるでしょう。しかし、多くの人が、切られて悲しい、残念と思うような大きな木は、その家の「所有物」なのでしょうか。大きな木は、夏は通りかかると木陰を、冬は周りの植物がより豊かに暮らせるように、腐葉土を提供しました。さまざまな動物に住処や食事を、土中の微生物や小動物にも多くのものを与えたはずで、人々の記憶に大切にしまわれているものであり、その記憶はときとして、その人の人生の宝物だったりするかもしれません。この木は個人のものだから、相続税が発生したなど、ときと場合によって伐られてしまったも仕方がない、ということではないのでしょうか？ この木は所有者だけのものだったのでしょうか？

第四小学校での保護者と地域の方とのミーティングでは、この木を例に、公のものごとと私のもので、について考えてみました。私のもので大切にしていればよく、公のものは公共的な主体が守ってくれるのでしょうか？ 暮らす地域に対する責任って何だろうか？ という問いについて考えたかったです。イギリスには「フットパス」という伝統があります。私有地を一定のルールの中で歩くことのできるルールです。それは、その土地の伝統や自然を知り、大切にすきかけになるのです。私有地を歩くマナーも考えることができます。地域のことは地域に暮らす皆で考えることができないでしょうか？

もうひとつ取り上げたのは、徳島県名東郡佐那河内村の事例です。佐那河内村では昔から、米を収穫した後の稲藁で藁を編み、奉納するしめ縄や鍋敷き、正月飾りなどの身のまわりのものをつくってきました。かつては

特別なことではなく、どの集落の人も身につけていた技や習慣でしたが、農業が機械化され、ビニール製品が出回り、藁は使われなくなっていきました。しかし、藁を編む技や習慣、それを大切にしてきた集落の伝統や人々の気持ちまで消えてしまったわけではありませんでした。あるとき、外からやってきた人が集落の人とは異なる目でそれを見出したのをきっかけに、集落の人たちは、もう一度藁を手にとってみるようになりました。身近なところにあるものを新しい目で見てみる、異なる興味で見してみる。外から来た人の目や力を借りることで、地域自身の気づきが更新されたのです。

2つの事例と、学校と社会をつなぐ国の施策などを振り返った後、参加者同士で話し合ってみました。斜面地にある神社やお寺は、学校ができる前から建っていて、学校の行事や運営に力を貸してくれていたこと、地域にある民俗芸能のこと、近所にある東京学芸大学がどのように学校と協働しているのか、といった、普段見聞きしない事例がたくさん聞かれました。これまでに七夕に竹を出してくれたという話題も竹林がなくなつたという話題もありました。学校からは、災害対策の宿泊型避難訓練の場所として、体育館を使った例も聞かれました。このとき行ったのは、ひとつの小学校で10人前後の会です。おそらく、もつとたくさんさんの知らないことが起きています。地域のこと、学校のことを皆で話すことができたら、お互いに見えることはたくさん見つかるはずです。

今回は、「竹取物語」という授業のために、近隣から竹を譲っていただき、子どもたちが造形をする授業に地域の大人が参加しました。そのため、竹に触れたことのない方々と竹について一緒に学ぶ時間も設けました。竹は学校のすぐ近くの神社とお寺のものを使い、また、参加した大人がまず竹について理解を深め、子どもたちが鋸や小刀を使う授業を安全に進めるために知っておくべきことを整理し

ました。また、どのように竹を伐れば、竹林を健康に保てるのかを知ることが、これから地域の竹林を管理していくために重要なノウハウとなりました。学校で使うために竹を譲ってもらったことが、地域の竹林を健康にしている、という利点は重要なポイントだったと思います。

この授業では、図工専科の先生、校長・副校長先生方が下見に行ったり、竹を譲ってくださる神社やお寺に依頼をしてくれました。図工専科の先生と参加したNPOは、必要な竹が得られるかどうかを確認する下見を繰り返しました。学校支援員さんは、地域の竹林の様子を共有し、また、伐採の予定があることについて、地域への声かけを行ってくださいました。多様な主体がそれぞれの持ち場で必要なことを行ったのです。凸凹があったり、うまくいかないこともあったかもしれませんが、そこからも学ぶことはたくさんあり、次回はこんなふうに行ってみよう、という気づきにつながっていきました。（宮下）



地域の人たちが集まり、街の歴史や大切なものについて話した。授業につながることもたくさん出てくる。

調べるって？

では、「調べる」とはどのようなことなのでしょう。

小学校の教員として、ある地域に赴任した先生は、勤務する学校のある地域とどのように出会うのでしょうか？ 自分の目の前にいる、長い時間をともに過ごす子どもたちは、どのような場所で暮らしているのでしょうか？ その地域には、どのような地理的な特徴があるのでしょうか？ 例えば大きな川がある、幹線道路の近くである、あるいは里山の名残があるなど、地理的な特徴は、暮らし方に大きく影響します。

地形や地理、地勢も、当然のことながら地域ごとに異なります。川や道路、線路などで区切られた地域には、今の形になるまでの来歴があります。場所によっては、大きく山や丘陵を切り欠いたり、盛土をしたり、森を切り開いて成り立っています。でも、よく調べてみると、実は縄文時代から人が住んでいた場合も存外多いものです。

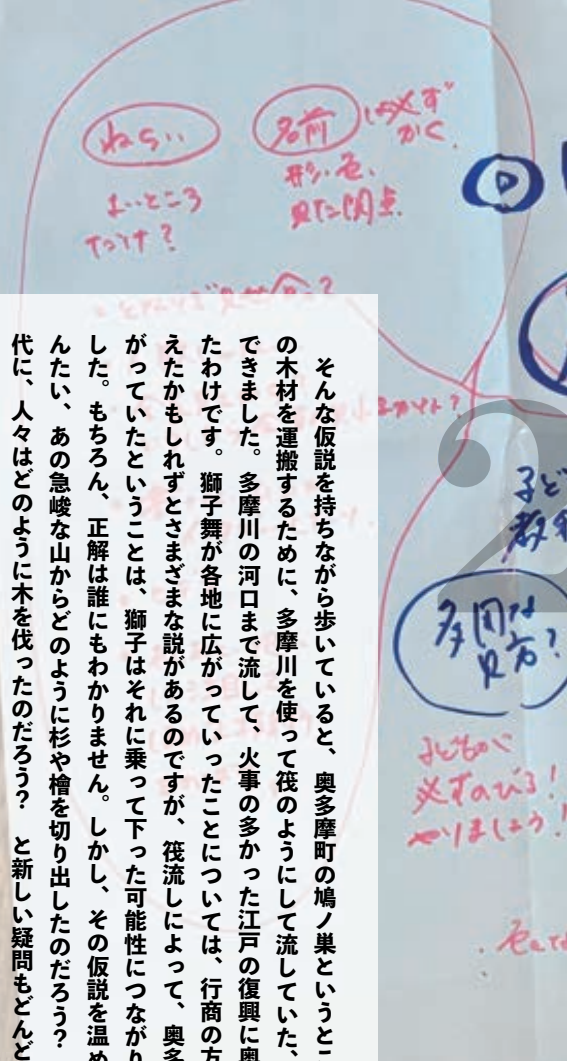
祭りや行事も同様です。祭りは、土地ごとにその来歴が異なります。そのため、装束や音、踊りや掛け声などが皆それぞれです。山には山の、川には川の、そして、街には街の祭りがありません。けれども、どこかが似ていることも多いです。それらの違いや共通点を基点にもっと深く探求していくことで、街の特色をつかむことができます。あるいは、戦争の遺構がたくさん残る街もあります。高度経済成長の時代にたくさんのお団地がつくられた街は、70年経って随分と変わりましたが、その街に暮らす人の多くは、お盆や正月に帰る故郷があったりします。

自分(だけ)の地図をつくってみる

その土地について調べる方法は、本来は100人いれば100通りあるはずですが、ここではインターネット検索は「調べる」には入らないことにしてみます。そして「調べる」は、お気づきの通り「知る」と切っても切れない関係にあります。通勤経路を変えてみたり、社会科見学に伴走してみるのもひとつの方法かもしれません。どのような施設があるのか、公園や緑地、河川、商業施設や古い集合住宅、戦争の遺構など、時間がないうちで、どのように地域を観察していくのか、自分なりの気づきの地図をつくってみてはどうでしょうか。

仮説空想芋蔓方式

2024年、奥多摩町立氷川小学校の総合学習における奥多摩学習では、ゲストに造形作家の下中菜穂さんを招き、2学期の末から3学期まで、授業をともしました。奥多摩町は東京を流れる代表的な河川のひとつである多摩川の水源近くにある、古くからの町です。ここでは集落ごとの獅子舞が伝えられ、大人も子どもも、地区の神社で舞います。かつて鹿と竹(あるいは樹木)だった子どもたちが言う獅子と「ささらすり」が、境内で豊かな踊りと音楽を繰り広げるわけですが、多摩川の下流である六郷(東京都大田区)近くに住む下中さんは、夏のある日、六郷でも奥多摩町のような獅子舞が子どもたちによって舞われてきたことに気づきます。なぜ、川の上流と下流の河口近くそれぞれに、同じような獅子舞があるのだらう。そこで、多摩川流域の獅子舞はどのように生まれたのか、伝えられたのかを考え、ひとつの仮説として、もしかしたら、六郷の獅子舞は多摩川の上流からやってきたのではないか、という楽しい問いを立てたのです。



そんな仮説を持ちながら歩いてみると、奥多摩町の鳩ノ巣というところで、江戸時代奥多摩の木材を運搬するために、多摩川を使って筏のようにして流していた、という話を聞くことができました。多摩川の河口まで流して、火事の多かった江戸の復興に奥多摩の木材が用いられたわけです。獅子舞が各地に広がっていったことについては、行商の方や山伏のような人が伝えたかもしれないとさまざまな説があるのですが、筏流しによって、奥多摩の上流と下流が繋がっていったということは、獅子はそれに乗って下った可能性につながり、仮説に尾鰭が付きましました。もちろん、正解は誰にもわかりません。しかし、その仮説を温めていくと、いったいぜんたい、あの急峻な山からどのように杉や檜を切り出したのだろうか？ チェーンソーがない時代に、人々はどのように木を伐ったのだろうか？ と新しい疑問もどんどん湧いてきます。

面白いのはここからです。あの急峻な山からどのように木を切り出したのかを考え続けると、いろいろなものの方が変わってきます。ロープウェイを見れば、誰が足場になるコンクリートを運んだのか？ 丸太を乗せた大型トラックとすれ違えば、あのトラックの荷台に木材を載せるとはどういう作業なのか？ そして、そもそもなぜ、戦後の人々は大きな森を切り開き、杉や檜の針葉樹を植えたのか？ いわば芋蔓式に疑問が湧いてきます。その一つひとつの正解のない疑問に、図書館や郷土博物館などを訪ね歩くことで、「芋蔓」が厚みを増していきます。

実証的な答えのない問いも疑問もたくさんあります。そもそも、世の中に答えがあるのかどうかも疑わしくなってきました。知りたいことを調べてみると、もっと知りたいことが増えてくる、という経験は、多くの方々が持っていると思います。それはとても幸福なスパイラルとも言えるでしょう。

この幸福なスパイラルを、学校の授業でどのように起こしていくのかを考えてみましょう。「知る」「調べる」を繰り返しながら、自分なりの認識の仕方を見つけ、その気つきを分類・グループ化したり、マッピングしたり、計測したり、物語化したりすることによって、対象への理解は深まり、認識は拡張されていきます。

物語の地層をめぐる「図工研究会

小学校中高学年の図工の学習指導要領には、子どもたちの「発想や構想の能力、創造的な技能」に関する指導事項が説明されています。中高学年は、それまでに知り得たものの質感や、色や形との対話の経験を駆使し、発想力や構想力を創造的な技能を用いてのびのびと発揮する年齢とされていますが、子どもたちがそれまで過ごした10年前後の時間に、その基盤となる十分な体験が保障されている

と言えるでしょうか。現代社会は過剰なほどの情報と無機質な奇妙に明るい画像にあふれ、望めば地球の反対側の出来事にアクセスできる環境にありながら、自分の住む街のたどった歴史や物語は、通学路のありふれた光景に溶け込んでしまい、容易には目に入ってきてません。まして、数年に一度赴任先が変わってしまう教員にとって、は、よほど目を凝らさない限りは見えてはこ

ないものかもしれません。2022年、私たちは多摩地区図画工作教育研究会夏期研究会で、全く特別な場所ではない「自分の住む街」を歩いて感じてみる試みを行いました。それは、目の前で何気なく傾いた地形の意味を想像し、そこで暮らしているように構想され、どのような創造的な技能が生み出され、手渡されてきたのかを発見する試みでした。出発点は昭島市立光華小学校。この小学校は、多摩地区で勤務する図工教員による夏休み中の研究会の会場であり、私たちが特別に指定したわけではありません。多摩川を有する昭島市にある、多摩地域のごく普通の小

学校を中心に「地域（生活の場）」をどう見るか
 ②「風景の観察を通して」と題して、講師の
 環境デザイナー・廣瀬俊介さんとともに、廣
 瀬さん作成の地形図と小さなスケッチブック
 を手に、30人あまりの図工教員と歩き始めま
 した。

酷暑の中を多摩川に向かって南へ。出発し
 て10分もしないうちに、廣瀬さんの解説から、
 光華小学校南側の周辺は武蔵野台地も含めると
 3段の段丘によって構成されていることを
 知り、まず驚きました。歩き始めて12分。2
 段目から3段目の段丘にかけて諏訪神社御旅
 所と諏訪神社が現れ、段丘からの豊富な湧水
 が水と生命と生活の密接なつながりを強く感
 じさせてくれました。段丘に寄り添うように
 人の手で積まれた境内の石積みを見上げなが
 ら、しばらくの間、図工の教員たちはそれぞれ
 自身の学生時代を懐かしみながらスケッチ
 を試みました。

湧水から運ばれてくる涼しい風に感謝しな
 がら、東へ徒歩3分程度で水神社に到着。水
 神社の辺りでは段丘から湧き出る豊富な水で
 わさび田が営まれ、すぐ北には境内に2段の
 段丘を有する熊野神社が祀られています。熊
 野神社には三百数十年の伝統を持つ東京都無
 形文化財「中神の獅子舞」が今も伝わってい
 ます。小学校を出発してから往復徒歩30分程

1. 段丘に沿って築かれた諏訪神社の拝殿。おそらく多摩川河畔の自然石を神社まで運
 び上げ、さまざまな形の石を組み合わせ安定した壁面の石積みが成立している。拝殿
 には清らかな湧水の起点がある。 2. 湧水を地域の隅々にめぐらせる水路。古くから
 の民家の入り口脇には各戸に小さな洗い場があり、畑から収穫した野菜や農具の土を
 洗い落とした。水路には冷たい湧水に適しためずらしい水草や藻が見られる。



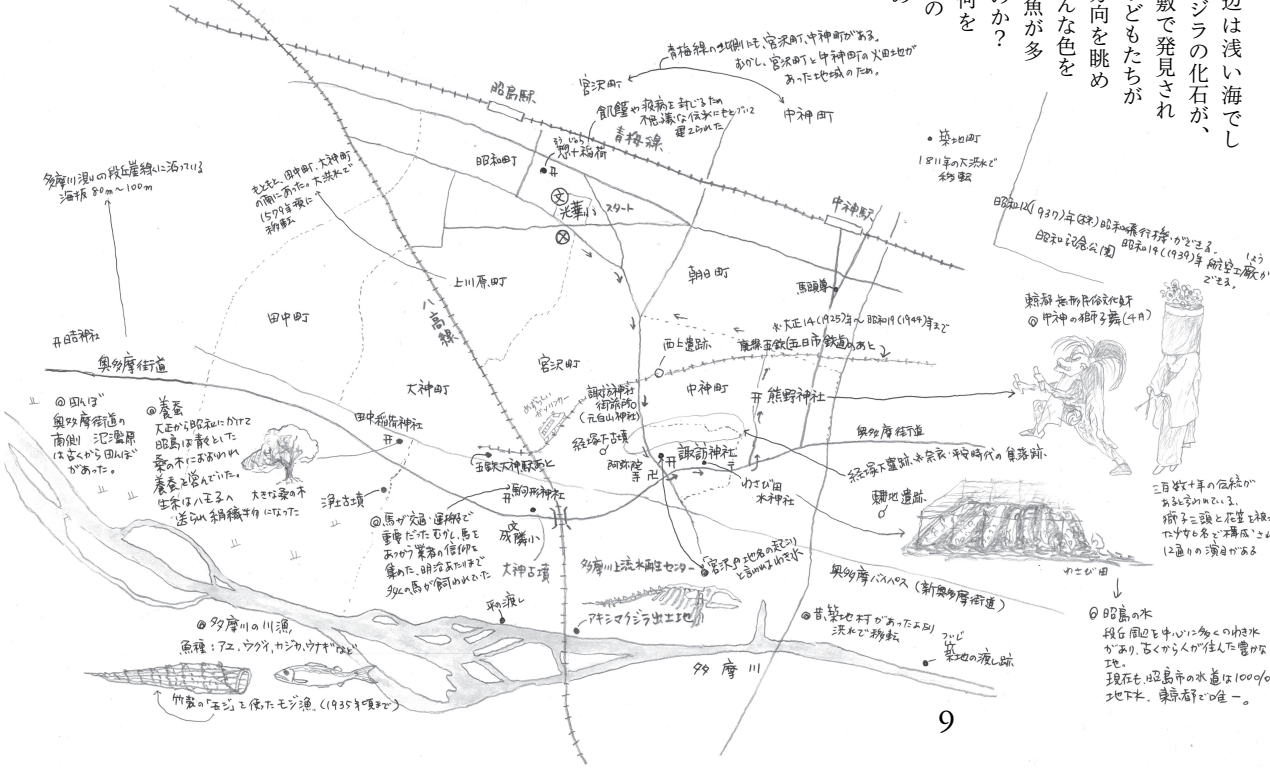
一度のエリアに、複雑な地形が生みだす音みや
 祈りや芸能があり、それらが次々と物語を伝
 えてくれ、想像する楽しさがフル回転で湧き
 上がってきました。

研究会の時間が限られているため、事前に
 昭島市郷土資料室で入手した資料を元に行っ
 た下調べによると、3段目の段丘のさらに南
 側には多摩川の氾濫平野が広がり、縄文時代
 や古墳時代の遺跡や、氾濫原を利用した田ん
 ぼの跡、養蚕が盛んだった時代の桑の原木が
 残っているなど、地層の断片があちこちに見
 られます。繰り返しされる多摩川の氾濫と移動
 による地形の変動に合わせ、そこに住む人々
 が開拓と移転を重ねながら、長い時間をかけ
 て今の街を形づくってきたことに気付かされ
 ます。

二百万年前の昭島周辺は浅い海でし
 た。海岸に迷い込んだクジラの化石が
 1961年に多摩川河川敷で発見され
 ています。古代昭島の子どもたちが
 段丘の端から多摩川の方を眺め
 ていたとき、大海原はどんな色を
 していたのか？ どんな魚が多
 摩川を遡ってきていたのか？
 奥多摩街道を歩く人は何を
 どんなふう運んでいたの
 か？ 飢饉や疫病を鎮め

るため、どんな物語が伝えられていたのか？
 無限に想像をめぐらすことができます。
 そんな想像の繰り返しの中で、自分だけが
 発想できる物語を創造することが可能になる
 のだとしたら、そのときこそ私たちは、手軽
 に入手できる画像や映像から始まるイマジ
 ネーションの限界を踏み越えていけるのでは
 ないでしょうか。地面の傾きを身体に刻みな
 がら歩いてみると、なぜ自分はそこで生きて
 いるのかという問いが生まれるでしょう。そ
 して、そこで生きていることを、何となくで
 はなく素直に肯定することを出発点に、自身
 の創造力に新たな地層を重ねられるのではな
 いでしょうか。（瀧本広子）

多摩地区国画工芸教育研究会
 小学校 国画工芸科 夏期授業指導研究会
 「地域（生活の場）をどう見ようか②」風景の観察と通し絵
 地区：平社、土地に根ざった文化、芸術の下部へ



調べたこと、見つけたもの・ことを 構造化し、探求する

奥多摩町にある氷川小学校では、総合の授業で奥多摩地域をテーマに調べ学習を進めています。自分の住む町について、時間的・空間的な広がり、町の出来事などについて、それぞれの子どもが主題を定めて探求を深めるにはどうしたらいいのかを考えました。子どもたちにとって最も難しいと思われたのが、問うべき何かを獲得することです。普通に暮らしていたら、慣れ親しんだ町や学校に、よほどの何事かが起こらなければ、深く考える必要がありません。

造形作家の下中菜穂さんをゲストに交えた授業は全体で15回実施しました。子どもたちの興味や関心を耕し、皆で共有しました。また、探求の成果を伝える方法を考えるため、ものを並べた本を見て図鑑について考える、運動会の獅子舞の披露、96歳の卒業生へのインタビューなどを行い、子どもたちが主題を絞り込んでいきました。本項では情報の構造化という観点から説明します。

授業では、まず、自分たちはどのようなところに立っているのかを知ることから始めました。自分の位置を確認するために、多摩川を真ん中に、水源から海に至るまでの絵地図を用いて、自分の家や友達の家、親や保護者、祖父母の家のほか、気になるところを落とし込み、俯瞰することを試みました。さらに、生きものが息をする場所、自分の遊び場などもポイントとして位置付けました。奥多摩の子どもたちから出てくる生きものは、熊、猿、日本カモシカなどの大型動物から、蛇、蝶やトンボ、カエルなどまで多岐に渡りました。また、どのポイントで紅葉がきれいなのか、魚が釣れるのか、地図を挟んで対話が繰り広げられました。山間地なのに「海沢」という地名があること、鳩ノ巣溪谷付近では筏に組んだ材木を下流に流していたことについても話すことができました。

多摩川の地図を用いたことで、もうひとつ気がついたこととして、多摩川の下流域に暮らすゲストの下中さんから、六郷という多摩川の河口近くの場所にも、奥多摩に似た獅子舞があることを教えてもらいました。次に、時間の広がりを考えました。こちら

は下中さんがつくった時間尺を用いました。紀元0年から2050年までを年刻みで印した木綿の尺です。この尺に、家の中にある古いものの年代、保護者や自分の年齢などを落とし込んでいきました。黒電話や古いお金、証文、おじいちゃんの観光写真など、たっさんのものが持ち込まれ、タグ付けされました。時間尺も多摩川の地図も、深みや広がり身体的に感じるのにはとても有効でした。

これらの取り組みを経て、子どもたちが調べてみたいことを短冊に書いて窓に貼りました。獅子の角、木々や動物など自然のこと、学校のこと、たっさんの項目が書き出されました。そこで、これからの調べ学習に向けて下中さんが提示したのは、「調べるってどういうこと? 10ヶ条」です。

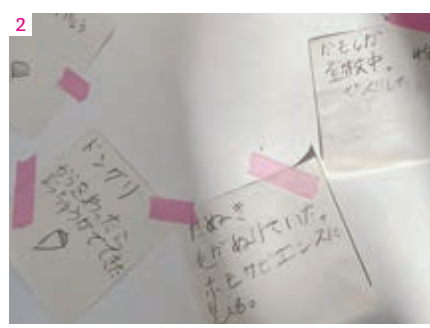
何気なく使ってしまった「調べる」という言葉。

実際「調べる」とはどんなことなのか、10個の要素に分けて考えてみました。これを繰り返して、反芻しながら、ものごとが腑に落ちる過程が「調べる」こと。「調べる」ことに迷ったら、ここに立ち戻って行動してみるべし、です。

調べるってどういうこと? 10ヶ条

- 1 心のアンテナを立てる
- 2 あるく
- 3 みる
- 4 きく
- 5 やつてみる
- 6 よむ(資料や本、写真など)
- 7 かく(なんでもメモしてみる)
- 8 想像する 考える
- 9 誰かに話してみる
- 10 対話する

子どもたちから調べてみたいこととして書き出されたものには、「獅子」や「学校」という、いわば大項目が多くありました。それらをもっと詳細にして、何を明らかにしたいのか、10ヶ条と往復し、友達の意見も聞きながら整理していきました。



1. 時間尺。家から持ち寄った古いものを年代順に目盛りに沿って並べてみた。中には黒電話も。 2. 奥多摩で見かけたことのある動物、植物などを皆で書き出してみた。

そこで出てきた小項目を並べて眺めてみると、「獅子」で括られた中にも、「さくら」のことや獅子の角のこと、衣装のこと、神様のことなどいろいろな事象があり、友達と重なるところ、自分なりのことが見えてきました。それをもっと深めるために、小項目を並べてみて、ある点から見たら関係性がある・ない、などを整理し、今度はその関係性を考えてみました。例えば、「森と獅子はどういう関係だろう」という問い。これには答えはありません。さまざまな仮説や想像が飛び交いました。それゆえ、見慣れた生活の空間を新しい目で見直すこととなります。

ここで行われたのは、情報を収集し、大項目、中項目、小項目に分けてみる、それらの関係性を考えてみる、そしてそこから見えてきたものをさらに探究するということでした。手書きの文字や絵は、一見すると子どもらしさばかりが目立ちますが、取捨選択をし、これか、あれかと道を探ることは、仮説を立て、それを検証する行為です。その際に、無駄を切り落とすのではなく、知り得たことをどのように、誰に伝えていくのかを想定しながら作業を進めると、寄り道や無駄、行き止まりを体験しながらも、考える・探求するというとても重要な技を身に付けていくことにつながります。(宮下)

きっかけにいいとをきけるやってみる

地域とつながるきっかけは、「調べてみる」からすでに始まっています。「調べてみる」と振りかぶらなくても、地域を知ろうとするとさまざまなことやさまざまな人の姿が見えてくるはず。近くには地元出身の主宰さんがいます。主宰さんは学校のある地域に暮らす人も多く、中には勤務期間の長い人もいます。もちろん、地元出身の先生方と話してみるのも、学校支援員の方に相談してみるのもよいでしょう。

学校の活動を手伝ってくださいと言うだけでなく、後出の眞砂野校長（P24参照）がおっしゃっているように、学校のほうから地域や地域の施設が抱えている課題と接合することも考えられるかもしれません。例えば混み合っている竹林の竹を使うことで竹林の健康状態がよくなります。町田市立小山田小学校の小澤新也先生は、赴任した年の春、小山田小学校の卒業生である学級担任の先生が、学校の裏の里山や竹林を案内してくれたと話しています。その竹は、2024年の授業で使われました（P17参照）。

調べることを通して、地域のこと、どんな人がいるのか、どんな課題があるのか、自然環境や社会的な環境、課題など、それらが授業とどのようにつながることができるのかと併せ、考えてみましょう。

里山の景観の残るところでは、農業を営む人がいます。また、自治会活動が活発なところでは、登下校の見守りをしてきている人たちもいます。野球やサッカーには保護者が熱心に立ち会っています。藪化しそうな竹林を持っている方、廃業する植木屋さんなどがあれば、伐採や運搬を手伝え、それらはお互いのために役立ち、また、子どもたちが地域のこと、目を向けるきっかけにもなります。特色のある行事や、すでに学校が実施してきた事業もあります。森を再生するために校外の斜面でどんぐりを育てている子どもたちもいます。伐採されたどんぐりの木はすぐに教材になるでしょう。

教科を横断してみる

もうひとつ、図工だけでなく、ほかの教科ではどのような勉強をしているのかを知ること、大きなヒントになると思います。社会科で古典芸能を学んでいるときには、地域に古典芸能をやっている団体はないだろうかと見まわしてみる、国語で宮沢賢治が登場するときには、賢治の物語を図工で展開してみる。例えば、賢治の物語には、野原やいろいろな生きものが登場しますが、その部分で地域とつなげ造形してみる、音楽と連携し、地域の固有の材料を使って楽器をつくり、野原で演奏会をするなど、子どもたちが毎日触れている教材はとても大きなきっかけになります。

やってみる

実際に授業のプログラムにしていけるのは、なかなか手間のかかることでしょう。もちろん、教育課程のどのあたりをどのように地域との連携にするのかは大きな課題かもしれません。調べたもの・ことを指導要領や教科の目標とすり合わせながら、どのように具体化したらいいでしょう？

学習指導要領の、「第5学年及び第6学年『A表現』(1)ア造形遊びをする活動を通して、材料や場所、空間などの特徴を基に造形的な活動を思い付くことや、構成したり周囲の様子を考え合わせたりしながら、どのように活動するかについて考えること。」を例にしてみましょう。

ここでは、材料や場所、空間などの特徴に進んで働きかけ、発想や構想を繰り返し、技能を働かせながらつくることに注目しています。そのためには、材料や場所などの具体的な特徴を捉えることが必要です。また、自分自身を取り囲む場所や、二次元的な広がりなどへの働きかけにより、豊かな造形的活動となるように、形や色、質感などだけでなく、切る(伐る)ことや組み立てるものであるといった材料の性質、光や風などの自然環境、人の動きなど、場所や空間の様子を含むこととなります。

また、活動の過程で生まれる新たな発想を大切にしたり、考えや思いの方向性を検討し直したり、一人ひとりが思い付いたことを出し合い、発想を刺激し合うことも大切でしょう。特にグループで造形活動をする場合には、お互いを尊重し合いつつ、素材の特性やグループの個性などによって、全体を構成していくコミュニケーションの力も必要になります。

主題に応じて使う素材や道具を考えてつくり、さらに、どのように展示・設置すれば効果的か、取り巻く環境や自然への興味・関心を持つことも大切になるでしょう。一人ひとりが材料や場所、空間などの特徴を生かして、どんなことができるだろうと考え、つくり、つくりかえて、つくることを更新していけるようになることは、学年に相応の力としても、とても大切だと思えます。

こうした観点からも、学校にある道具や素材、市販の教材だけでなく、地域のできごと、文化や歴史、社会的な特徴と、実際に教科で学んでいることにブリッジをかけるのはとても効果的であると言えるでしょう。

ちすらいの竹林が図工と出会う〜その1

井上農園さんは地域の古い農家で、社会科見学の子どもたちを畑に受け入れたり、農業に関する出前授業を行ったりと、本業以外でも忙しくしておられます。その井上家の入り口には鬱蒼とした竹林があり、どちらかというところと孟宗竹の多いこの地域で、節間が長く全体的にスマートな竹があることが以前から気になっていました。思い切って「これは真竹ですか?」と聞いてみると、そうだとのお答えでした。

子どもたちが、竹を切って、割って、曲げ

て、竹の自在性や扱いやすさを体感しながら思い思いに大きな造形物をつくり上げるには、重くて身の厚い孟宗竹より、軽くて薄い真竹の方がよいと以前から考えていました。でも、この地域には真竹が少ないのだから仕方がないと諦めかけていたところ、真竹が増えすぎて困っているとのこと。昔は遠くから竹細工職人さんがもらい受けに来ていて、毎年定期的に竹を伐ることがあったけれど、今は近くの保育園や児童館の七夕祭りのときと、たまにある地鎮祭で何本か伐ってあげるくらいだ

と云うのです。

真竹は本来、竿竹や籠など種々雑多な製品に加工しやすく、それらがプラスチック製品に置き代わる前は、毎年伐って加工しても、次々に生えてくることで、バランスが保たれていました。今回、図工で竹を使いたいという学校は、同じ市内でも真反対に位置する遠い小学校でしたが、それでも快く竹を伐ることを了解していただきました。

井上さんの竹林は、長年使われることが少なくなっていたせいか密集し、林に入り込むことも、伐り出すことも容易ではなく、竹が息苦しいと言っているように見えました。近年住み始めた近隣の人から、竹林を寝床にしているスズメが早朝からうるさいと苦情がくることもあるとのこと。

私たちは、立ち枯れたり途中で折れている

竹などを優先的に伐採し、あとは密植状態のところからなるべく古い竹を伐るようにしました。そこに真竹があるというだけで、同じ町に住む以外なんの接点も縁もない私たちが、弱った竹林のためにできることがあるとしたら、整備も兼ねて丁寧に伐り出すこと。節を残さないように枝を払い、枝と枯れた竹は、後で市の処理車が入りやすい位置にまとめておくようにしました。

全部でおよそ25本。3mに切り分けて50本余りを、井上さんは日頃農産物を納入する際に使っておられる1トトラックに積んで、約4km離れた小金井市立第四小学校まで運んで下さいました。

「こんな遠くの小学校まで来たのは初めてだな。これで市内全部の小学校を回ったよ」

井上さんは嬉しそうに、少し誇らしそうに笑って竹を降ろし終わると、早々に地元に戻られました。

農家の方の多くは、仕事柄土地との長い年月の付き合いがあるからか、地域の子どものために協力するのは当たり前と、惜しみなく力を貸して下さいます。井上さんからも、「農家という生業を続けてきた何代も昔から『地域』に愛情と責任を持って生きてきた。それを、今も続けているだけだよ」と、言葉ではなく言われたような気がしました。

農家のように土地に働きかける仕事ではなくても、私たちが同じ地域で生きるものとして、地域の子どもたちと一緒に育て、学校をどうか考えました。(瀧本)



1

さすらいの竹林が図工と出会う その2

昨年、小金井市立第四小学校6年生の図工で、井上農園さんの真竹を使った大きな建物づくり「竹取物語」は、その年の作品展で校庭にずらっと力作が並び、保護者からも好評だったと伺いました。

何より、最終学年である6年生のちょっとした緊張感と、思春期の走り、いろいろなことが億劫になったり、急に子どもじみたり、揺れ動いてしまう年頃に、竹という素直だけれど反発も強い、まるで6年生そのもののような素材を、グループの仲間と話し合いながら、自身の身体よりも遥かに大きな作品に仕上げるという経験を成し遂げたのは大きいことでした。図工担当の河野先生は、ガツンと手応えのある仕事を、小学校最後の図工の時間に経験させてあげたいという希望が叶ったのだと言います。

そして、今年度の6年生にも同じように取り組ませたいと再び相談がありました。昨年は扱いやすい真竹にこだわったために、少し遠い井上農園さんの竹を使わせてもらいましたが、今度は第四小学校校区の地元で竹を探してみることにしました。

実際には昨年、四小のすぐ隣の、元は前田さんという方の庭で、今は市の公園の一部になっている竹林から竹をもらっていました。各クラス2本ずつ伐る作業をもらい、子



2

1. 竹伐りの現場で竹割りも体験したあと、割った竹を前後2人で担いで運んでみる。
2. 竹林から学校が近い場合は、手分けをして何本かずつ運ぶことも可能だが、離れている場合はリヤカーがあると便利。主事さんの作業用リヤカーがあったので、お願いして借りることができた。(1、2ともに東村山市恩多の竹を採取するワークショップより)

どもたちが校庭まで伐った竹を運んだのです。しかし、孟宗竹なのは仕方がないとしても、ここでは20本も揃わず、伐り出す体験はできても材料として利用させていただくのは難しかったという経緯がありました。

そこで、コミュニティスクールの地域コーディネーターの方などに、地域の竹事情を調査してもらいました。竹林のあるお宅を探すなど、地域コーディネーターの役割としては突拍子もなかったに違いありません。

すると、ついこの夏までは確かに竹林だった場所がすっかり更地になっていたというケースや、竹林の持ち主のお宅が空き家で、誰に聞けばいいかもわからないという、今日的な問題が一気にあふれ出てきました。それでも、近くの古い農家さんに相談してもらったところ、孟宗竹は筍として春に出荷されているようで、しっかり現役で活躍している竹林であることがわかり、安易に伐らせてほしいとは言えない事情が見えてきました。

ところで第四小学校は、国分寺崖線のきわにあり、急峻な崖の真下には貫井神社と真明寺という由緒のある神社と寺があります。学

校協の急坂を降りると、塀の向こうに鬱蒼とした竹林らしきものが見え、校長・副校長に確認をお願いすると、どちらにも竹林があり、学校運営にも非常に協力的であることがわかりました。

早速、副校長からアポイントをとってもらい、真明寺と貫井神社の方に会うことができました。どちらの方も快く竹を伐って使うことを了承してくださいました。

真明寺はかつて、第四小学校創建のために境内の土地の一部を寄付したり、地域で保育園を運営されていたりと、地元の子どもたちの教育への熱意がうかがわれます。ところが、真明寺の竹林は急峻な崖にあり、真下の墓所を通らずに伐り出すことが難しいことがわかり、残念ながら断念せざるを得ませんでした。そこで、学校の敷地により近い、貫井神社側の竹を伐らせていただくことにしたのです。

学校のグラウンド側フェンスのすぐ向こうには国分寺崖線の雑木林が広がり、崖の中腹あたりから、貫井神社の竹林が広がっていました。予め副校長より伐採する日程を社務所に知らせておいていただくと、崖の侵入路の

下草がきれいに刈られており、伐った竹をグラウンドに搬出しやすいよう整備されていました。さすらいの竹林は学校のすぐそばで、丁寧に下草刈りまでされて待っていたのです。

そして、3mに刻んだ何十本もの竹を校庭に運び込んでみると、グラウンドで少年野球のコーチをしていた地域の父親たちが一緒に運んでくれました。教員が授業のために懸命に準備をしている姿を見て、手を貸さずにいられなかったのでしょう。伐り出した竹は、若い父親たちによってお祭りのように担がれ、あつという間にグラウンドを横切っていくきました。(瀧本)



1



4



3



2

1. 学校の裏手にある国分寺崖線から貫井神社を見下ろす。 2. 地域の方々がヘルメットを被り、伐り出し作業に集合。 3. 竹の根元側から引き出すには、どちらの方向に倒すべきかを一緒に検討する。 4. 枝を落とし、程よい太さの部分3mに切り校庭へ運び込む。

身近な植物から色を抽出して 絵の具をつくる



1

1. 色から感じ取ったイメージを形にしてみる。 2. 桑の枝から葉だけを切り、小さくカットする。 3. さまざまな植物から抽出した色素を消石灰の上澄みに吸着させ、沈澱したものを濾す。 4. 各班で違う植物の色を抽出して分け合い、試し描きで発色を確認しながら印象を形にする。



2



3

小学校で子どもたちは、クレパスや水彩絵の具、あるいはタブレットに配置されている「カラー」で色と出会います。しかし、樹木や草は一樣にみどり色ではないし、幹も茶色だけではありません。目を凝らしてそれらを見ようとしない限り、木はみどり、幹は茶色と記号のように表され、その本当の色の多様さには気づきにくいでしょう。

河原の小石を見つめていると、水に浸されている石は鮮やかで、岸辺で乾いている石は少し白っぽく見えることに気づきます。よく見ると、鮮やかな赤い石がポツンと目立ってそこにあることにも気づきます。その石をちょっと動かして、黄色っぽい石や土っぽい色の石の側に置くと、茶色に見えたりします。でも、白や黒っぽい石の側に戻すと、またもや鮮やかな赤にしか見えない、という経験をすることはないでしょうか。目の前に見えているはずの「色」とは何なのでしょう？

2022年の夏休みに、私たちは日の出町立平井小学校で行われた東京都図画工作研究会西多摩研究会で、「身近な植物や食品から色をつくる」という実験を試みました。校内にある枇杷の木の間定枝、地域の公園のヤマモモの葉、学校農園のクマザサ、給食室でもらった玉ねぎの皮など、無理のない範囲で採った身近な植物を刻んで、ステンレス鍋で1時間ほど煮て、途中で食用ミョウバンや消石灰水の上澄みを加えて、色の成分を吸着・沈殿させ、重ねたサラシ布で濾して乾かします。それぞれ、赤紫系のグレー、オレンジに近い

黄土色、青みを帯びた薄い黄色、茶色に近い黄色と、簡単には名付けられない色味ながら、色が本来もつ力強さに驚きました。

それらに、定着剤として澱粉のりや膠水などを加えて画用紙に塗ってみると、塗ったときと、乾いたときの色の印象が随分と違います。月日が経つともっと変色することもありますが、必ず移ろい、褪せてしまう色ですが、確かに私たちの身近にはさまざまな名前のない色があふれているのです。

研究会の後、新学期に、私たちは日の出町立本宿小学校の6年生を対象にした、さまざまな植物を使った「色」づくりの授業に向けて、さらに実験を試みました。栗の渋皮向け、さらに実験を試みました。栗の渋皮向けはピンクや赤、夏の雑草のヨウシユヤマゴボウからは、鮮やかなエンジ色に近い色がとれます。また、最近街なかで数を増やしている外来種のカウネズミモチの黒い実からは、青紫や青がとれることがわかりました。色味の差はあっても、植物からは黄色系の色が出るのが全体的に多いのですが、身近な植物で意外と鮮やかな色を発するものもいくつか見つかりました。

こうして、本宿小学校の6年生たちは、班ごとにつくる色を決めて、それぞれの班がつくった色を持ち寄り、一人ひとりが厚みがあるミューズ

コットン紙に描いてみました。描くものは、具体的な物や生物などではなく、色のオノマトペのようなもの。色から感じるリズムや形状を画面に落としていく作業でした。

6年生とはいえ、名もない色の印象を抽象化することが難しい子もいた一方、頭で考えるのではなく、枠からはみ出ることが少々得意な子は、水を得た魚のように色と戯れていました。

早い段階から思考すら外部委託し、安易な合意のもとで量産されるモノであふれる今の社会で、じっと見ることや、考えることを繰り返す経験やその記憶を蓄積することこそが、自分の言葉でものを考え、身体を通して思考・判断・表現を行う営みにつながるのではないのでしょうか。(瀧本)



4

つながりを

「くる、育てる、引き継ぐ」

4

さまざまな主体との関係をつくる

地域と連携する授業を図工専科の先生がひとりで行って企画運営するのは、とても大変です。そこで学校支援員さん、主事さん、教科の先生方のほか、地域の自治会、神社や寺、地域の芸能団体、NPO、大学、福祉系の団体などが連携先になったり、中間支援的に動いたりすることも考えられます。中間支援となる団体は、学校の規模や立地に配慮しつつ、先生方の意向と授業の内容などを調整し、地域の資材や資源とつなぐ役割を果たすことができます。

自治会などには、卒業生や、古くから学校を知る人もたくさん関係しています。毎日の登下校のサポートをはじめ、学校で大きな事業があるときには、これまで学校に関わってきた方々に、学校を通じて案内が送られることもあるようです。

神社やお寺も、多くが学校ができる前からその地にあります。古くから地域コミュニティの中心として大切にされてきたり、コミュニティの課題解決を担ったりしてきた場所でもあります。竹林や自社林を有するところもあり、また、地域に伝わる説話や地域の変化をよく知る方もいらっしやいます。

多摩地域には古くからの美術大学があります。教育系の大学や地域を舞台にまちづくりなどを学べる大学もあります。これらの大学はさまざまな形で学生を交えた地域連携の事業を実施しています。学校によっては、地域連携室のようなところもあります。また、研究室の単位で活動しているところもあるので、思い切ってドアを叩いてみることをお勧めします。教育系の大学や教育学部のある大学には、学校でのボランティアを希望する学生もいます。

もちろん、市町村の美術館や郷土博物館などには、真っ先にアクセスしてみるのはいかがでしょうか。学芸員さんだけでなく、サークルのような活動団体がある場合もあります。鑑賞教室を実施している美術館や、教員研修会として、学校教員の方を対象とした図工・美術に関する研究会や研修会を開催している美術館もあります。このような研修会を利用して情報収集をしたり、研修会をきっかけに授業づくりへの連携が生まれる場合もあります。小金井市では、先立って学芸員が学校を訪問し、事前のプレゼンテーションを行い、美術館の鑑賞教室を実施しています。この機会を活用し、洋画家・児島善三郎さんの風景画を鑑賞した子どもたちが、「森の中で風景をつくる」と題したワークショップを公園で実施したこともありました。ただし、人が動く費用が発生することがあります。アーティストを招聘したら謝礼が、資材を運搬するにはトラックや燃料が必要、という具合に、教材費で賄うのはなかなか大変です。そこで、外部の費用や資金をどのように活用するのかを考えることになります。

アーティストを招聘する事業や支援しているところは、例えば文化庁や文科省、地域の公立・私立美術館、企業などさまざまです。文化庁、私設の美術館には教育普及を担う部署もあります。「教育普及」「アーティスト派遣」「助成金」などのワードで検索してみることをお勧めします。ヒントになるプログラムや学芸員とのネットワークづくりは大切です。

関係を育てる―双方向であること

いずれの主体との関係も、「やってほしい・やってあげる」という一方通行では、持続性は保てません。調べて歩いた中で出会ったことや発見したこと、知り得たことを携えて対話を始めてみましょう。コミュニティ・スクールの制度は、地域が学校運営に参加する仕組みです。地域から学校への一方通行で、せっかくな歩いて発見した気づきからの対話が成り立たなければ、お互いに疲れてしまいます。

また、歩いて調べた中で気づいた、地域の課題や困りことはいらないでしょうか。この報告書で何度も出てくる竹は、かつては、農作業でも暮らしの中でも用いられた有用な植物でした。ライフスタイルが変化し、例えば、竹の物干し竿が金属やプラスチックに変わる、あるいは田んぼが減少し、稲を乾かすために竹を使う機会がなくなるなどで、需要が減り、竹林はどんどん拡大しています。そこで、園工の授業で竹を使えば、1学年2〜3クラスの規模で大きな造作をする場合、少なくとも50本くらいの竹が必要となります。健康な竹林に戻していくための適度な伐採に協力できる可能性も生まれるでしょう。あるいは、地域で使われなくなった公園をどうしたら子どもたちが楽しく遊べる場所にするができるのか、アイデアを絞ってみるのもいいかもしれません。

もうひとつ、大きな双方向性になるのは、地域の方との協働で成し得た授業の成果をさらに多くの地域の方にもお伝えすることです。展覧会などの学習発表会を地域の方々に見てもらう機会をたくさんつくることも大切でしょう。こんなことをしているのだ、こんな道具や材料を使っているのだ、と知ってもらおうと、地域の方からもアイデアが生まれるに違いありません。学校や子どもたちへの親近感も高まります。もちろん、大切な作品を見てもらえる貴重な機会です。

そこにある歴史と資源に気づく―縄文ハウス

学校の敷地に竹やぶがある。学校田んぼとその地域支援がある。街のあちこちに縄文遺跡がある。そこで、「そうだ、竹と藁で縄文ハウスをつくらう」。そんなことを思いついた園工教員がいました。思いついたら即、校長と6年生の担任に相談してみました。

「ならば、子どもたちに竹を伐るところからやらせてみたいですね」「地域にお手紙を配ってお手伝いを募集しましょう」

ひらめきが実現に向けて着実に動き始めました。そんなうまい話があるわけがない？いや、そんな話があったのです。

そこは町田市立小山田小学校。多摩丘陵の

一角、町田北部丘陵に位置し、鶴見川の源流域でもあります。水に恵まれた地形により古くから稲作が行われ、典型的な里山の風景がモザイク状に残るこの地域も、かつては鶴見川の最源流域も含めた宅地化計画が立ち上がり、多摩ニュータウンへと続く一連の開発の波にさらされました。

しかし経済の衰退にともない、20年程前に事業計画が中止され、町田市によって計画地域の買い戻しが行われ、源流を含む里山地域がぎりぎりのところで残されることになりました。地域の方々、開発の嵐の中で放置され荒れてしまった鶴見川最源流の雑木林を再



5年生が学校田んぼで稲刈りをした藁で、6年生が人生初めての苫を編む。



1

の苦をあらみ わが衣手は 露にぬれつつ」という和歌が含まれています。彼らが中学校で百人一首を習ったとき、何人か気づくのではと思うとワクワクします。藁は日頃、学校田んぼの指導をされている「田んぼ友の会」の方々によって保管していたものを使いました。

これらの一連の作業には、地域の元自治会長さんや、源流保全活動のNPOの方も応援に来てくださいました。子どもたちに手を貸す、声をかけるタイミングが絶妙で、慣れおられる様子。それでも、太めで重い竹を支えるのは6年生でも苦勞してしまう場面があり、私たち大人も一緒に必死で支えながら、つい「孟宗竹ではなく真竹だったら少しは軽いですけどね」と本音をこぼしてしまいました。すると、元自治会長さんは「なんだ。真竹だって言ってくれたらあったのに……。町内には孟宗竹も真竹も両方あるよ」と、町じゅうの竹事情にも詳しい様子でした。地域の材料のことは地域の人に相談してみよう。当たり前のように、このように地域の過去と現在を知るキーパーソンに出会えることはまれです。学校側も、日常の授業や行事を通して地域の方との関係性を築く機会をつくっておられますが、地域の側も、子どもが卒業したら学校との縁を終わりにするのではなく、学校と何らかの形で関わる機会を持ち続けるのは大事なことです。それは野球チームでもサッカーチームでも図書ボランティアでも構いません。地域の人が学校に入り入るのには、子どもたちにとって悪いことではないと思います。

のではないという発想が根付き、学校を中心とした地域づくりの長い継続が実現したのでしょうか。そして、その実現を足がかりに、いつでもお互いに補充し合える関係性を育むことが可能になったのではないかと思います。学校だけ、あるいは地域だけが頑張っているでも上手くいきません。双方からいつでもつながることのできる関係性を、一部の志の高い方たちだけではなく、もう少し裾野を広げて共有できるようになればと思います。(瀧本)

生きせる活動を始めました。

小山田小でも、3年生がどんぐりを苗床に植え、6年生になると源流の森まで歩き、成長した幼木を植えに行くことが学校行事となっています。辛くも開発による破壊を免れた里山の自然や生業、史跡や祭りなど、残っていたものを守りたいという気持ちは、ほかの地域より強いのではないかと感じます。一度失ってしまうと、そこに何があったのか忘れ去られるのに時間はかかりません。しかし、失われていたかもしれないものが守られたとき、大切に残したいという思いは一層強くなるかもしれません。そんな小山田小で6年生が縄文ハウスをつくることになったのです。

丘を削るように切り拓いた場所に建つ小山田小には、斜面に孟宗竹の林があり、伐つてすぐに校庭へ運び出すことができます。孟宗竹は太くて重いので、直径12cm以内のなるべく細いものを選び、長さ3mに刻んだものを各クラス20本伐り出しました。

1グループ10本の竹を、元と末をそろえ、末側を結束し、傘の骨のように広げる。安全のため、広げた元側には1本ずつ小割りを削ったバグを打ち、竹に結びつけました。10本の竹に湿らせたシュロ縄を螺旋状にめぐらせ、竹の枝を下から縫うようにはきみ込んで屋根の下地にし、さらにその上に、藁で編んだ「苦」を重ねて結び付けていきました。

「苦」という言葉は、漢字も読み方も意味さえも、現代ではほとんどわからなくなっています。授業に伴走する私たちは、この「苦」の編み方を古い資料から見つけ出し、編み方を図解して各班に配布しました。子どもたちは、たぶん初めて聞く言葉と作業だったでしょう。百人一首に、「秋の田の 仮庵の庵

幸い小山田小は、地域総出のマラソン大会や、新年のどんど焼き、各神社のお祭りなど、子どもたちが学校以外で成長する場と、地域の大人に接する機会をいくつも持っています。そんな場があることによって、子どもは学校だけで育つ



2

1. 竹を組み、シュロ縄をめぐらせ、枝を編むようにはきみ込んで屋根の下地をつくる。
2. 校庭に出現した竹と稲藁の縄文ハウス。

地域の施設とつながり、育む ハンセン病資料館の見学から

多摩地域には、ハンセン病療養所だった国立ハンセン病資料館があります。その施設のある東村山市の小学生は全員、6年間に一度は、社会科見学で同館を訪問しています。

ある年、市立南台小学校の6年生は、ハンセン病資料館を見学し、居住者の方にお話を聞き、また、青年男子が居住した場所で昼食をとり、園内を自由に散策しました。目の不自由な方のための交差点の存在を知らせる音も聞きました。近所にあっても見たことも聞いたこともない場所や出来事だったはずですが、これまで同校では、訪問ののち、感想文を書いていたのですが、訪問での経験をより深めることができないうか模索し、図工の授業で造形を通じて考えてみるプログラムをつくりました。プログラム中は、写真家・趙根在さんの写真集『趙根在写真集…ハンセン病を撮り続けて』(草風館)や、同じく写真家の権徹さんが詩人の桜井哲夫さんを撮影した写真集『てっちゃん ハンセン病に感謝した詩人』(彩流社)などをグループごとに用いました。授業は参考図書を読むところから合計5回実施し、最後は校内に作品を展示するというものでした。グループワークの初回は手を動かさず、それぞれの気づきを分かち合う時間としました。といっても、なかなか会話が弾まない。趙さんの写真集をめくりながら、てっちゃんの



1

詩を読みながら、小さな声で気づきを話しました。それでも沈黙が訪れる……。私は思い切って、子どもたちに、「なぜてっちゃんはライになってよかったって言ったんだと思う？」と尋ねてみました。するといろいろな意見が出て、その中の一つに、「ライになって、皆に差別のことを伝える仕事を担うことができたから」という意見がありました。そこで私は、やや意地悪であることを自覚しつつ、「ではあなたもライになる？」と聞いてみました。子どもははっとして、「あ、おれ、いやだ」と。別のグループでは、昼食をとった青年たちが暮らした家の屋根裏を作品にしました。不自由な身体となった方々が、暖房が支給されないため、夜中に薪をとり森に入り、それを隠したと聞いたことを丁寧に作り込みました。子どもをもてなかつた方々が、一緒に暮らした犬や猫のために自分たちの墓地より立派な墓をつくったことを確認したグループもありました。300分の1の敷地模型を見て、施設長の家が、病を得た方々の家より遥かに立派であること、亡くなった方の遺体を火葬したのは、海外に出自をもつ人が多かったことも知りました。

手や身体を使い、友達と対話し、何度も反芻し、気づきを更新する。更新された気づきは造形物になって外在化されると、また新たな気づきのきっかけを生む。そして、小学校でのグループワークは、グループ内での合意をつくったり、一緒に制作をする中で、自分にはない気づきの存在を知る。さらに、このときにも顕著だったのは、同じクラスのほかのグループの制作したものが校内に展示されたことで見えてきた、同じ見学体験を経ても、気づきはさまざまであるということです。

この授業では、地域の大人7人ほどが毎回参加しました。大人たちは、見学にも同行し、グループワークに参加しました。大人にとっても、自分自身が出来事をどのように受け止めるのか、子どもたちとともに考えるのかを深く問われる機会でもありました。(宮下)

※かつてハンセン病は癩(ライ)病と呼ばれていた。



3



2

1. ハンセン病資料館の見学後、グループワークで、経験したことをさらに調べ深めた。 2. それぞれのグループで、制作するためのアイデアを書き出した。気づきを描いていくこと(手を動かして、気づきを共有すること)で、アイデアが徐々に骨格を現してくる。 3. 子どもをもつことができなかつた方々はペットを大切に、お墓をつくった。そのお墓は人間の墓より立派だった。そこに気づいたグループでは納骨堂とペットのお墓をつくった。単に見たことを再現するのではなく、気づきや発見を一旦抽象化し、制作しているという点で、アートになる。

国語＋マタギ＋造形による知覚の拡張

6年生の国語の教科書に宮沢賢治の「やまなし」が掲載されています。いろいろな学校で「やまなし」を学ぶ時期に、賢治の研究が行われているのを見かけます。図書室から廊下に宮沢賢治の本を移動し、ミニ賢治文庫になっていたり、ひとりが一作を定めてより深く読み込んでいたり、気づきを分析して図示していることもあります。そこで私たちは、小金井市立本町小学校で担任の先生と図工専科の先生と相談し、図工を通して賢治を考え表現してみようことにしました。

教科書に載っている「やまなし」は、詳細に読み下しがなされているので、「なめとこ山の熊」を主題にしました。生きものを殺すということをいろいろな角度から考えてみる中で、自分が生まれ生きることについて考えるきっかけにつながるのではないかとというのが選択の理由でした。

物語の読み方はさまざまです。文字として読むだけでなく、イメージの形成がとても大切です。そこで、賢治をたくさん読んで、秋田からマタギに来てもらいました。自分の発した鉄砲の弾が生きものに当たった感触を

知る人と出会うことが、子どもたちの理解を拡張させると考えたのです。マタギの鈴木英雄さんが、お祖父さんが実際に熊を捌くのに使っていた山刀や彼らが射止めた熊の手や心臓、熊が好きな木の実をたくさん持ってきてくれました。山刀の重さや、鉛の玉が熊に当たったときの空気の振動を知る人の話は強烈でした。子どもたちは賢治を読み、マタギに出会い、その経験を得てから造形し、グループで写し絵の芝居をつくりました。匂いや重さ、手触りを得た一人ひとりの気づきや知覚を確認し、拡張する狙いでした。そして、その時間はとても躍動的で豊かでした。子どもたちの制作には、地域の大人たちも伴走しました。

学校の授業は便宜的に教科に分かれていきます。しかし、子どもの経験や認知、知覚は教科のように分かれていません。いわばひとつの全体＝wholeです。そして、マタギの鈴木さんはいわゆる「アーティスト」ではありません。しかし、学校の外からやってきた「マレびと」として、アーティストと同じ役割を果たしてくれました。いや、それ以上だったかもしれません。秋田弁で「なめとこ山の熊」の朗読もしてくれました。一緒にやってきたマタギ見習いの青年は、生きものを殺して食べたり、生活の用にとりたりすることへの疑問から、大学を休学してマタギから山全体で生きることを学んでいると話しました。自分たちと年齢の近い人の話は、子どもたちの内省に深く影響しました。

鈴木さんは、自分のやっていることが、子どもたちに何かをもたらすことができるのか、そんな意義があるのか、ずっと心配していました。秋田の阿仁マタギの中で、もっとも東京の言葉がわかる人として派遣されたのです。東京は怖いとおっしゃるので、新宿の駅まで迎えに行きました。アーティストのように、「これ」をやったらよい、という経験も

確信もない。普段の自分たちの暮らし、熊との交感を丁寧に語ってくれながらも、そこにどんな意味があるのか、慄きつつ、子どもと同じくらい緊張もしていたように見えました。つまり、マタギの鈴木さんは、「与える・与えられる」という関係には陥らず、同じ場所、ときを過ごし、ともに振動しつつ考えたのだと思います。(宮下)

1. 実物の人間サイズのマタギの絵に、服装や持っているものを書き写してみた。 2. これはなんだと思う？ 話しかける鈴木さん。答えは、ウサギを獲る道具でした。 3. 熊の餌になるブナの実などを実際に食べてみて、なんだかとても驚いた。



桑の葉染めで総合学習と大学との連携

多摩地域では昔盛んに養蚕が行われていました。街のちよつとしたところに大きな桑の木が残されていたり、小金井市にある東京農工大学工学部の前身が蚕糸学校であったりとかつて「桑都」と呼ばれた八王子の織物産業を、多摩地域の養蚕農家が支えていた歴史を今も感じることが出来ます。思いがけず、校章に桑の葉が使われている小学校に出会うこともあります。当時の生業に対する誇りと、蚕を通して美しい絹を生み出す桑の葉への親しみと畏敬の念が読み取れます。

そうした小学校のひとつで、4年生が総合学習で養蚕を学ぶ授業に合わせ、桑の葉で染め物を行うということを知り、一緒に体験させて頂きました。

ここでは、女子美術大学の染色の先生によって、地域の小学校の教員向けに、毎年桑の葉染めの講習会が行われています。それは図工専科の研究会というわけではなく、毎年入れ替わっていく教員の間で、地域と強いつながりのある「蚕」や「桑」についての学習が途切れずに引き継がれていくよう、小学校と女子美術大学との間で長年の協力体制が確立したものです。

講習会に参加した担任たちは、さっそくここでの経験を地域の歴史に触れる授業に活かしたり、教室で蚕を育ててみたり、生徒ひとりずつに蚕を持ち帰らせ、毎日桑の葉を与えながら繭になるまで育てる取り組みを行うこともあるようです。

そして、夏休み明けには、実際に桑の葉を使って絞りを染めを行います。各クラスの担任は、子どもたちと校庭で刈り取り、ハサミで細かく刻んだ桑の葉を、染める前日に大きなホーロー鍋で1時間ほど煮立てておきます。子どもたちは、バンダナサイズの布に、ビィ玉や割り箸を輪ゴムできつく絞って防染模様を付けていき、隅には小さくろうけつ染め

で名前を入れます。防染を終えたら、しばらく水に漬けて絞ったバンダナを、桑の葉を濾して熱した煮汁に漬けて少しの時間置き、次にアルミ媒染液（ミョウバン）か鉄媒染液に漬けます。すると、アルミ媒染は青みのある明るい黄色に、鉄媒染はモスグリーンに変化します。古代から脈々と受け継がれてきた化学反応との初めての対面に、子どもたちはざわめきます。

染まり具合を見ながら煮汁と媒染液に漬ける作業を反復し、最後に酢を入れた水で色止めを行い、いよいよ、防染のために縛ってあった輪ゴムを外します。熱で縮んで固くなったゴムを、布を切らないよう慎重にハサミで切つて縛りを外すと、くしゃくしゃだったバンダナに鮮やかな絞り模様があらわれ、子どもたちから歓声が上がりました。

染めの授業には、学習ボランティアの保護者の方も手伝いに来られ、教室は物干しに吊るされた黄色とモスグリーンの布であふれます。これらのバンダナは、秋の運動会で子どもたちそれぞれに巻かれ、ダンス表現の場で地域に披露されます。

この事例は、地域と学校が大切に伝えたいと願う文化や技術を、大学との連携という形で継続することに成功しています。染め物ならば図工というように狭義に捉えるのではなく、教科担任と図工教員、学習ボランティアと一緒にあって、総合学習や生活科の一環として、子どもたちが地域の未知と重層的に出会える、とても興味深い仕組みだと思えます。

こういった取り組みを、どんな地域でも取り入れられるようにするためには、継続的でしなやかな中間支援組織の存在が重要ですが、もしかしたら、私たちの周辺をもう一度見直してみると、気づいていないだけで案外近くに見つかるものかもしれません。（瀧本）



桑の葉染めのバンダナ。
左はアルミ（ミョウバン）媒染。
右は鉄媒染。

振り返る

5

学校と地域の協働で、どのようなことを実施し、成果や課題が何だったのかを整理しておくことは、学校にとっても参加した学校内外の人たちにとっても、あるいは次につながる人たちにとっても大切です。しかし、記録を残すためにたくさんの労力を傾けることは現実的ではありません。

授業の様子を写真に撮るだけでも、その間に子どもに気を配るほかの人の目が必要になることもあります。

そこで、市教研（教育研究会）や多摩図研、都図研（東京都図画工作研究会）などの枠組みを利用し、発表すれば、記録が残ったり、他市の教員たちと意見交換ができたりし、研鑽にもつながるでしょう。

あるいは関わった方々に簡単なアンケートに答えてもらい、ファイルに綴じておく方法や、インターネット上にアンケートフォームをつくっておき、毎年ベーシックな質問を積み重ね、意見や気づきを集約するという方法も考えられるでしょう。いずれにしても、ひとりの気づきではなく、関わった人たちの多面的、多層的な気づきや観察を得ることで、次の授業に、そして、地域との新しい関係につながっていきます。そこには必ず、子どもたちの様子も書き添えて、できれば生み出された作品や子ども感想も添付しておくことで、意義のある振り返りが生まれることでしょう。



3



2



1



4

1. 学習発表会は地域の人も参観する。近隣からもらった素材による作品も展示され、地域と交流できる大事な時間だ。 2. ひとつの学校ではまかないきれない道具を、先生方に声掛けして一定期間貸してもらおう。どこに何があるかを知っていて、都合することは大切だ。 3. 市教研の研究会の様子。身の周りの自然素材で筆をつくってみた。 4. ハンセン病資料館を訪問し、授業で深めた（P19参照）後、授業に関わった大人たちで地域の人、先生と共に研究者を招き、話を聞き関心を深めた。

眞砂野裕（昭島市立光華小学校校長）インタビュー

「風」を吹かせることが学校の仕事

聞き手：宮下美穂

教育目標に「まず、やってみよう！ 私の学校は私がつくる！」を掲げる昭島市立光華小学校。その実践として、2023年11月に校庭の一角に保護者や地域の方の協力のもと、子どもたちの自主的な遊びの場「プレイパーク」をつくり、地域に開かれた場としました。地域と学校の可能性、そして課題について、眞砂野裕校長にお話を伺いました。

宮下 図工の授業に関わらせていただく中で、素材や技術について考える際に、地域と学校が連携したり、学校と地域の間を隔てる壁がもう少し低くなるというのは？ と感じることもあります。実際に学校を運営する先生方は、地域をどう捉えていらっしゃるのかお伺いしたいと思います。光華小学校では、図工の授業で地域の材料を使う、地域の人にも入ってもらう、プレイパークなど学校を開くさまざまな活動をされています。眞砂野先生は、地域との関係にどのような可能性や課題があるとお考えなのか、お聞かせいただけますか。

眞砂野 まず、イメージとしてもっているのは、「風土」という言葉です。学校には「風」を吹かせる責務があると思っています。格好よく言うと、子どもたちの未来の幸せにつながっていく風です。少なくとも風の状態はよくなって、ぼくたち教員の役割は、学校という場を借りていろいろな風を吹かせていくことだと思います。

ただ、教員だけがいくら一生懸命やっても、異動などの限界があり、その風は止んだり向きが変わったりします。そのとき、土地、つまり「土」である地域の方たちがしっかりと風を支えてくれると、文化が生まれ根づいていきます。いい風が吹いていたんだから、止められないよと言ってくれたり、あるいは止まっても、もう一度ボタンを押してくれたら。それが「風土」であり、学校と地域の理想的な関係だと考えています。

宮下 なぜ、そうした「風」を吹かせる必要性を感じられたのでしょうか？

眞砂野 現在、学習指導要領が2030〜2040年を見据えた内容に改訂されようとしています。今の子どもたちが社会に出ていく未来ですね。その頃の日本社会は、残念ながら、おそらくより厳しい状況になっているでしょう。ここではないどこか、例えば外国に行くかもしれないし、隣にはまったく違う考え方が住んでいるかもしれない。そんな多様性社会が、子どもたちの「本番の舞台」なのです。そこでは、いつでもどこでも誰でもコミュニケーションがとれて、自分の立ち位置もつくれる力が求められるでしょう。

そう考えると、学校はもっと「チャレンジのプロ」でなければと思うんです。失敗してもかまわないから、やりたいことをやる。そういう学校教育にしていくなきゃありません。子どもたちが「やってみたい！」と思ったことを支えていく学校集団にしていかなないと、子どもの「骨太な主体性」が育たないと思っています。

そしてそれは、ひとつの教科の中だけではできないことではありません。学校全体で「まずやってみよう」をキャッチコピーにして、「私の学校は私がつく」という空気感をもたなければなりません。

校庭につくった「プレイパーク」もそのひとつです。単に遊具を増やすのではなく、子どもの「やってみたい！」を大事にするシンボリックな場になるのではないかと考えたのです。

宮下 そうしたお考えのもとで実践を重ねられる中、地域はどのように見えていますか？

眞砂野 地域は「リソース」のかたまりだと



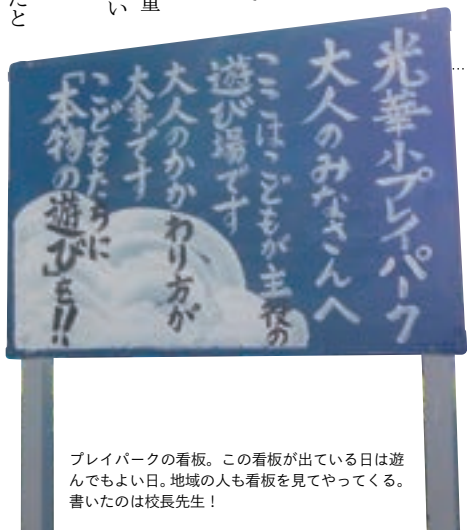
まさの・ゆたか
東京都昭島市立光華小学校校長。専門は体育科教育。全国で親子や保育士・教員向けの運動遊びを展開している。公益財団法人日本学校体育研究連合会参与、日本トップリーグ連携機構A級プレイリーダー、(株)ミズノプレイリーダーマイスター。

思います。例えばうちの学校では、夏休みの最初の1週間、「サマースクール」というものを行っていて、そこでは毎日いくつか講座があるのですが、講師はほとんどが地域の方です。みなさんが得意分野を生かして、陶芸や藍染、手品、和算などのほか、野球、バスケットボール、空手などのスポーツ体験教室もあります。講師料は無償で、材料費はこちらがもちます。子どもたちは、教科書がない学びってこんなにあるんだ、おもしろいんだと体験することができると。そういう学校にとっての大きなリソースが地域にはあるのです。

ただ、正直に言うと、地域の一部の人にかたがっていかない状況もあります。それ以外の人はこちらを向いてももらうにはどうしたらいいか……。焦らずには思いつつ、課題も感じていますね。

地域の「やりたい！」をキャッチする

宮下 自分が卒業した学校であってもなくとも、地域の方たちが学校は大事などころだと思ってくれるといいですね。



プレイパークの看板。この看板が出ている日は遊んでもよい日。地域の人でも看板を見てやってくる。書いたのは校長先生！



プレイパークで火を燃してみる。

眞砂野 そうですね。ここは創立68年目の学校ですが、以前ぼくがいた150年の歴史がある学校と比べても、負けないくらい、この小学校出身の方はもちろん、地域の学校だという感覚をもっとくれている方は多いように感じます。

宮下 地域の方にとっても、学校と関わることで得るものがあるかもしれないですね。自分の趣味や経験を生かし、働きかける相手がいるのは、幸せなことでしょう。そう考えると、地域の人が学校に対して「手伝ってあげる」という一方のベクトルではないはずですね。地域の関わった側にとっても、得るもの、考えること、あるいはそれをきっかけに地域がより豊かになる関わりの方、可能性があるように思います。

眞砂野 それはすごく大事なことだと思います。学校が「ボランティアを募集します」と言うと、応募してくれる側は、どうしても「やってあげる」になりがちです。

ぼくがだんだんわかかってきたのは、地域の方が「やりたい」と思っていることをこちらがキャッチして、「やりますか？」と声をかけると、多くの人に来てくれるということ。先ほどのサマースクールも、地域の方とのちょっとしたやりとりの中で、「学校で自分の趣味や経験を子どもに伝えられるなら、ぜひやりたい」という人たちがけっこういるなど感じたところからのスタートでした。

先日は、小平市のグループが、光華小のプレイパークで1泊2日のキャンプをしてくれ

ました。そのときぼくがすぐに手を組んだのは、プレイパークを維持していくためにも、他団体さんの責任のもとで使ってもらう方法もいいたろうと思っただけです。子どもからすれば、どこが主催でもかまわないのですから。それに、昨今のアウトドアブームもあって、家族でキャンプをしたい人は増えているだろうと。夜、灯がともったテントが校庭いっぱいになり、並ぶ白川郷のようなイメージが浮かび、乗ってくれる人がいるんじゃないかと思っただけです。

実際は15家族限定でしたが、普段はあまり見かけないお父さん、お母さんたちが参加してくれました。ニーズに合っていたのだと思います。保護者会ではできないような交流が生まれて、ぼくもいろいろな話ができ、面白かったし、やってよかったなど。そんなふうに、保護者や地域の側のニーズをつかむことが大事ですね。学校にとってもプラスになります。

宮下 そのキャンプは、もともと地域間の交流のような目的をもったイベントだったのですか？

眞砂野 初めからそういう硬い目的があったわけではなく、純粹にキャンプ体験です。小平のグループがそれまでは地元の公園でやっていたのを、たまたまうちの学校の教員がそのグループに入っていたことから、せっかくなプレイパークがあるなら、面白そうだからそっちなでやりたいとなったんです。結果的には小平市の家族と昭島市の家族が集まったので、おのずと交流になりました。子ども同士

はすぐ一緒に遊ぶから話が早いし、大人は料理をしながらおしゃべりをしたりして、「また来年やろうね！」と。

宮下 学校との関わり方は、人によって頻度や深度が違っていいですね。でも、地域の特性を教科に生かすことはあっても、学校の側から地域のニーズをキャッチしていくというこ

とまで考えている先生は、あまり多くないように思います。

眞砂野 いずれはそうせざるを得なくなると思います。すでに文部科学省が「地域学校協働本部」という、地域と学校の連携体制を推進して促していますし、実際、学校だけで教育活動をやるのは難しい。

ひとつはお金の問題です。ぼくらに予算の裁量権はないので、やりたいことをやるためには、地域の人の力を借りなければなりません。ぼくはそこは校長の裁量だと思っています。

一方の地域の人たちも、高齢化などでメンバーが固定化している現状があります。だから、地域にとっても学校とのコラボレーションは大事なのです。

うちの学校の隣には社会福祉協議会があるのですが、そこで話を聞くと、福祉を通じて市民生活を活性化することを目的にしています。なんだ、学校と近いじゃないかと思えますよね。じゃあ一緒にやりましょうとなるわけです。そんなふうにごんごん手を伸ばせば、仲間を増やしていくことができます。

ただ、そのときにもやはり、「学校のためにお願いね」というだけだと関係が続きません。お互いにウィンウィンの関係をつくっていく必要があります。例えば、お客さんが集まりにくいようなイベントでも、学校がやれば、保護者だけでも1,000人単位の人が参加します。一方で学校側は、フットワークが軽い人材を必要としている。そうした関係づくりと見きわめが、これからの学校、とくに校長の手腕にかかっているんじゃないかと思えますね。

宮下 たしかに福祉というと、困っている人のもとで考えがちですが、実際は障害者や高齢者だけでなく、子どもはもちろん、あらゆる人が対象だと思います。福祉との「重なりしろ」ができる、教育の視野も広がりますよね。

眞砂野 それは学校教育の中でも、ずっと言われてきたことです。いわゆる「多様性の相互承認」が必要で、車椅子に乗っている人も知的障害がある人も垣根を低くして、お互いに共存していく社会にしないと、大げさに言えば、日本は生き残れないんじゃないかとぼくは思っています。

以前、学校を迂回して散歩されていた障害のある方に、どうぞ入ってくださいと伝えたら、頻繁に入っていただけのようになりまして。すると子どもたちにとっても、だんだん「特別な人」ではなくなってくるんですね。そういうことが、学校という安全な場でどんどん行われてほしいと思うんです。

塀と壁で子どもを守るか？

宮下 昨今、世知辛くなる中で、私的なものと公共的なものとの間の壁が高くなっていくように感じます。でも実は、私的だと思ってる所と、公共的だと思ってる所と境目が、溶け合う、あるいは衝突してみることとで、民主主義とか自治について考えることが多くあると思います。例えば個人の庭の大きな樺の木は、個人のものかもしれませんが、環境的にも景観的にも、それからさまざまに生き物にとって大切なものです。たくさんの方の記憶にも残るでしょう。そういうものを持つ公共性を地域で大事にしていこうという立場は大切だと思います。また、イギリスのフットパスのように、私有地を一般の人が通行できるようにするためのルールやマナーを皆で定めてそれを守る、といった自治は重要です。一つひとつの係争を乗り越えていくことで、地域の課題解決の底力も生まれる。

本来、学校は公共的な役割を担う場であり機能ですよね。学校が地域に「滲み出ていく」ことは、あるいは地域が学校に染み入っていくことは社会にとっても大切だと思います。

眞砂野 学校は、教室のドアを閉めてしまえば、大人ひとりと子どもだけの世界です。学校には学校の文化を邪魔されたくないというような感覚、小さなプライドのようなものがあるのだと思いますが、それではもう生き残っていけないし、何より子どもたちは多様性の社会に入っていくのですから、学校に多様性がなければいけないというのは、もはや当たり前の話だと思います。

とはいえ、ひとたび悲惨な事故や事件が起きると、「安全第一」の名のもとに、ほかの人は入れるべきではないとなってしまいます。子どもたちを守るためには壁をつくらざるを得ないところもあり、それは当然なのですが、ただ、それだと身動きがとれなくなってしまう。

宮下 高い塀や壁をつくと、安全を守る一方で、何かあったときには外から見えない。むしろ不特定多数の人が出入りをするので、たくさんの方の異なる目を通して危険を察知してもらえらるなど、安全性が高まるのではないかと思います。もちろんリスクもあり、それをどう考えるのかも大きなテーマですが。

眞砂野 学校側が腹をくぐる必要がありますね。「高い壁」を学校特有のプライドだと考えたら、それを下げて、現状を見てくださないと開いてしまえばいいと思います。リスク管理も含めて、批判も受けるかもしれないけれど、どうぞ見てくださーい。地域の方と腹を割ったお付き合いをするということかもしれません。

プレイパークにしても、子どもたちがけがをするかもしれないと思うと怖いですよ。いともびくびくしてしまいますが、それ以上に子どもたちに必要なものがそこにあるので、腹をくぐるしかない。リスクを考えたいえでも、やったほうがいいことはあります。

宮下 子どもたちを守る壁を、コンクリートの壁にするのか、たくさんの方の目の壁にするのかで大きな違いがありますね。コンクリートの壁はネガティブなものを入れられないけれど、それ以外のものまで排除してしまおう。一方、人の目は、ネガティブなものを排除してくれたり、あたたかい見守りにもなるかもしれない。そこには信頼関係や、学校で行われているこ



学校ができたときに地域の方が移植した楠に新しくできたデッキ。根っこも守ってくれるし、遊ぶ場にもなる。

とへの共感や興味が不可欠ですが。

眞砂野 実際、地域の人や保護者から、日常的に辛辣なものも含めていろいろな指摘や意見をもらっておいたほうが、ドカン！と大きな問題が起きないと思っています。

加えて、「聞こえない声」を拾うのも大事です。いいことでも悪いことでも、声を出せる保護者の方はいたい決まっています。「本当はこう思うんだけど……」と言えない方も多い。それはクラス経営にも言えて、目立たない子に声をかけることも、子どもの自己肯定感を育てるうえで、教師の重要な仕事です。同じように、もしほくが学校全体の担任だとしたら、保護者や教員のあまり大きくない声に耳を傾けることも、すごく大事だと思うんです。もし壁を高くしたら、大きなものしか見えなくなってしまうのではないかと気ががします。

宮下 でも、先生方が地域の小さな声にまで耳を傾けるのは、現実的には難しい部分もありますよね？

眞砂野 なるべく地域の方と接する機会を増やすしかないですね。ぼくは、毎朝校門に立つようにしています。「あれ、きょうはいつもと違うな」といった子どもたちの様子がわかることはもちろんですが、いろいろな情報が入るからでもありません。たまにお母さんたちから、「先生、実はね……」と話を切り出されることがあるんですね。

みなさん面と向かうとなかなか本音を言にくいのですから、意図的に話しやすい雰囲気をつくっています。がっつり正面から「おはようー」と言うのではなく、斜めから言いますか、準備運動しながらさわやかに「あー、おはよう」と言うくらいにする。そういうことは意図的にやっていますね。

子どもを閉じ込めてはいけない

宮下 人は、自分を取り巻く世界との関係の中で育まれるように思います。都市がいけないとか、田舎がいいといったことではないのですが、地域の中で多様な出会いや経験は得難いものではないでしょうか。かつては土地固有の風土、地勢、生業が地域の文化を育みました。



子どもたちが自ら企画し運営・開催された「こどものまち」(2024年11月29～30日)のこども銀行。



でも、そういうものが大量消費社会の中で消滅し、暮らしは均質化する傾向にある。そして子どもの生活経験は貧弱になったように思います。何気ないことのように思いますが、土地の気候風土やそれに根差した生業、地域の文化の中で呼吸し、遊びや祭りなどの身体全体を通した経験がその人の人格、あるいはアイデンティティの形成に影響すると思います。田舎が良くて都市がダメ、などという狭い話ではなく。

眞砂野 そうですね。だからこそ、子どもを学校の中だけだとか、小さな世界に閉じ込めちゃいけないと思うんですね。よく言われる、子どもの「時間・空間・仲間」を、大人はあまりにも狭くしてしまった気がします。

ぼくが小学校1、2年生のとき、当時、「ドラえもん」に出てくるジャイアンのようなガキ大将がいたんですが、ある日仲間3人で、その子に向かっていったことがあります。当然、ボコボコにやられてしまったんですが、そういう多少危ないことも含めた子どもの体験や世界が「骨太な主体性」を育て、「やってみたいことをやる」という自信の土台になるんだと思うんですね。子ども時代の一つひとつの体験が、すべて「心のひだ」になると思っています。

いまの若い先生の中には、そういった体験を経ずに大人になった人もいて、それゆえに、子どもにもう一步食い込めない部分があるように感じます。例えば、泣いている子を見たときに、悲しいのか、切ないのか、悔しいのかかわからない。理由によっては、ただそばに泣いているのかわからないから、その子の保護者の顔が浮かんだりして、あわてて泣くのをやめさせようと思います。しかも残念なのは、心のひだが少ない人は、こういう話をしても、何のこともかわからないのです。そうして簡単に「心が折れる」となってしまう。それはご本人にとっても苦しいことですよ。

そうした心のひだを育むためにも、子どもには遊びが必要です。子どもから遊びを奪ったのは大人です。だとしたら、子どもに遊びを返すのも大人の責任だと思います。

宮下 デジタルネイティブの子どもたちは、そうした遊びや体験がタブレットに置き換えられてしまっていて、危うさを感じます。国はデジタル教育に注力していますが、それと同時にリアルな体験も確保したいですよ。

眞砂野 とくに公立小中学校は、そのことを意図的にやっていかないといけないですね。やはり人は人の中でしか育ちません。これからの世界に向けてデジタル教育が必要なのは確かですが、それは黙っていても入ってきますから。そうではないほうの体験を大事にしたほうが良いということに、すでに多くの人が気づいているのではないのでしょうか。

デジタル化は止めようがないけれど、社会はこれ以上進化するというよりは、成熟していくことが必要だと思えますね。ほとんどの場合は、デジタル系の話はどうも頭に入っていないですよ。そういう話題になったときに、口を閉ざして静かになります(笑)。



「こどものまち」の会期中に体育館で開かれた展覧会プログラム「こどもびじゅつかん」。子どもガイドが活躍!

宮下 今後、眞砂野先生が異動されたとき、地域の人がつなぐ役割を果たすとともに、学校側でも、先生たち間で引き継ぐような仕組みはあるのでしょうか?

眞砂野 具体的な話になりますが、教師でも保護者でも地域の方でもない、コーディネーター役の人を学校に置くことが考えられます。ぼくよりずっと若い元教員の方がNPOを立ち上げて、学校と地域をつなぐ活動をされています。うちではいまその方に、運営側に入ってもらっています。以前は学校評議員といわれていたような仕事ですね。そういう人をつかっていくことが、ひとつ考えられます。

宮下 眞砂野先生がロールモデルになることも大きいですよ。眞砂野先生が異動されても、残った先生方が引き継いで、さらにまたほかの学校に移って行って、根っこのように拡張していけば、それは教育全体の底上げになるし、ゆくゆく大きな変化につながりますね。「ああ、ここまでできるんだ、ここまでやってもいいのだ!」という体験は、先生方にとっても一歩踏み出すことにつながる。それはその人に残っていきますね。

眞砂野 そうですね。この学校のために、というだけではなく、先生たちが「学校はもっと面白くなる」というスピリットを持って次の異動先へ行ってくださるとしたら、それはぼくができる最大限のことだと思っています。学校は絶対に、もっと面白くなるはずですから。

「答え」がない場所で、折り合いながら生きていく

聞き手：宮下美穂

地域の側から見たとき、学校とつながることとはどんな意味をもつのでしょうか？ 地域と学校の希望ある関係性とは？ さいたま市で福祉農園の運営に携わり、市民活動やボランティアについて長く考えてこられた猪瀬浩平さんに伺いました。壁や枠で区切られた風景が反転し、一人ひとりの可能性が広がっていくお話です。

学校を開くと地域はどうなる？

宮下 「地域」という言葉は、現行の学習指導要領にもさまざまな形で出てきますが、もうひとつ実像がつかめない気がします。若手の先生がいきなり「社会に開かれた教育課程」学校と地域はパートナーとして相互に連携・協働」と言われても、実現性もさることながら、必然性も具体的に想像することはかなり難しいのではないかと思います。

そもそも「地域」とはどういうものなのか。あるいはパートナー、連携、協働とは？ さまざまな制度が整備され始めているとはいえ、今はまだ、保護者や地域の有志の方が授業を「手伝う」としてまわっているように思います。また、「学校を地域に開く」という言葉もよく聞きます。では、開く先の社会はどうなっているのか。学校との関わりで地域に何が生まれるのかも考えたいと思っています。手伝う・手伝われるという関係を超えて、その人がその人として暮らす場をお互いに考える、何かしらを担い合うことはできないでしょうか。

猪瀬 時代とともに地域が変質していることを考える必要がありますよね。かつて地域の中で機能していたものが、もはや機能しなくなっている。それがなぜなのかを考察しないまま、以前の「物語」や優良事例を語られても、地域住民も保護者もどうしていいかわかりま

せん。

ぼく自身、今子どもを預けている学童保育はNPOが運営していて、保護者の参加が求められます。長時間の保護者会に参加しなければならぬなど、かなり負担があります。ぼくが子どもだった1970～80年代は、そんなふうに関わることがあって自主保育を立ち上げ、子どもの教育に参加することが、都会の住民自治をつくる機能も果たしていたと思います。

しかし、親の参加で子どもが幸せになるという物語は、現代の忙しい親からすると現実的ではない。むしろ専門の職員がしっかり子ども面倒を見てくれる体制を望んでいる方が多くいる。たしかに保護者と子ども全員参加のキャンプをすれば、みんなが顔と名前を覚え合い、ほかの子どもの面倒も見られるようになり、何でも言い合える関係になるかもしれない。でも、それはもう一般化できないでしょう。物語をつくり直さなければいけないと思います。

宮下 20年ほど前、私の子どもが共同保育に通っていた頃はまだ、お迎えに来たお母さんが職場でなのか家庭でなのか、何かあって元気がなかったりすると、保育士がアイスキャンドゥーをくれて、縁側で食べながらちょっとおしゃべりをして帰るといったことがありました。保護者同士でお互いに子どもの面倒を見合う、預かり合うこともあり、その中で子育て環境や地域のことを話す機会も必然的によくありました。でも今は難しいかもしれないですね。私的な領域とパブリックな領域がキチキチに分かれていて、しんどい状態ではないでしょうか。

猪瀬 先ほどの学童保育の話でいうと、学童がパブリックにあたりますが、行政が民間が

つくった学童を下請けにしているような状況があります。民間学童は公設学童の定員が少ない分を補い、そのうえ自分たちで信頼できる指導員を探さなければなりません。公設学童と比べてお金も労力もかかります。そして多くの地域は子どもの数が増えているのですが、公設学童は定員は増やさず、受け皿づくりは民間の学童に迫られます。

ぼくが関わる学童は古い民家で運営していたのですが、そこを出ていかなければならなくなりました。敷地面積のある古い家は、売れば2、3軒の家が建つので、学童に貸す場所を見つけないのは困難だし、入れたところがマンションの一室となると、縁側があったような民家のゆるさはなくなり、カチッと閉鎖された場所で運営されていく。すると、地域との関係は騒音問題に対してどう謝るかわからない話になってしまいうんですよね。

宮下 これは希望的な話ですが、本来は公や専門家が担う役割を、親や地域が担わなければならないなくなったとき、それをきっかけに違う方法論を見出したり、地域が新しい力や技を身につけたりできると、おもしろいことが起きる可能性はないでしょうか？ 多摩市の「三丁目の家」では、軒先で子どもたちが穴を掘ったり火をおこしてイカを炙ったりしています。そこは別に、民間学童でもないんですよ。隙間で、ゆるい。でも、かなり意図的に意思を持って生まれた空間だとも思います。学校との連携を足がかりに、支援する・しないではない何かを、自分たちが暮らす場で見つけていけたらいいですね。

誰かの答えよりみんなの気づきを

宮下 先日、猪瀬さんが携わる「見沼田んぼ

いのせ・こうへい
明治学院大学教授。大学
在学中の1999年から「見
沼田んぼ福祉農園」の活
動に携わり、現在は事務
局長。『野生のしっそう
障害、兄、そして人類学
とともに』（ミシマ社）『分
解者たち 見沼田んぼの
ほとりを生きている』（生活書
院）など著書多数。

福祉農園」に伺いました。そこでお昼ごはんをいただきましたが、歩きながらお茶碗とお箸を持って食べている子どもや、チェーンソーの講習をしている近くを子どもたちが遊びながら通りかかったりする。でも、ここは危険、ここはオツケとゾーニングすることは、何か空間や人と人の関係を窮屈にする可能性もある。猪瀬さんはどう考えられますか？

猪瀬 そういうことをぼくなどが先まわりして注意するのはなく、参加した人たちから気づきが出てくる場にしたと思っています。昔は農園も、ボランティアをする自立した主体を育てようという意識が強くなりました。障害のある人がボランティアをされる側なのだから、ボランティアをする人は誰かの世話になってはいけないと。「ボランティアのボランティアはいらない」という考え方です。

でもそれでは、世話をされる側かする側のどちらかでないといられない場所になってしまふ。ややすつとんきょうなことをする人などを排除する雰囲気はまずいし、今ボランティアをしている人だって、子どもが生まれたり、年をとったりしたら、来られなくなるわけです。

また、この農園が成り立っているのは、多くの兄など障害のある人たちが作業してくれているからです。以前は、週末にボランティアに来る人たちが農園を支えているように見えていたけれど、本当は逆で、平日、継続的に作業している人たちがいるから、週末にいろいろなことができています。だとすれば、ここでのボランティアは実は彼らじゃないかと考えるべきです。

そんなふうを意識を変えていく中で、開園当時は農園の代表が「まずい」と気づいたことを判断し、やめさせたりしていた部分がありました。そうではなくて、気づくところからみんなが担当の大事だと思うようになりしました。

宮下 ひとつの問題に対して、トップダウンではなく気づいた人が気づいたことを声に出して言える状況があるほうが、一つひとつを厳しく「解決」するよりむしろ大事かもしれないね。何が危なくて危なくないのか、何がよいか悪いかなどは、はっきり決められない曖昧なものも多いと思います。

同じ食事の場で、ある男の子が長靴でお味噌汁を蹴ってしまいました。そのときお母さ

んは、もしかしたらみんなに迷惑をかけるからと、テールからその子を連れ去っていかれました。でも、彼なりに何か気に入らないことがあったのかもしれないし、どうにもならない感情があったかもしれない。そのとき、私自身がどうすればよかったのかわかりません。とっさの振る舞いや言葉が他の人を傷つけてしまうこともあるでしょう。でも、どうしたらいいのか、考え続けてみたいと思いました。

猪瀬 あの日ほかに、口に入れた餅をブツ

と吐き出した子もいましたね。餅をついてきてくれた人がそれ見て、駄目だよといって軽くボンと頭をたたいた。いまの社会的にはNGとされるかもしれない行為ですが、ただ、その人には怒る権利があるとも思うんです。だって自分がつくった餅を吐き出されたら腹が立ちますよね。その子は餅の感触が好きなかっただけかもしれないし、おいしいと思ったら吐き出さなかつたかもしれない。そういう背景も想像するほうがいいと思います。でも一方で、誰かが本気で怒ることで、その子が初

さいたま市緑区にある「見沼たんぼ福祉農園」は、知的障害者の就業活動などを行うNPO法人「のらんど」など7団体で運営している。1999年の開園前は廃棄物が投棄される荒地だったが、農業や化学肥料を使わない農業の実践により環境も改善した。(P31写真とともに撮影/森田友希)



めて、自分の感覚がどうであれ、それは誰かを怒らせてしまう行為だと気づくのも大事だと思っただけです。

昔、釜ヶ崎の「あいりんセンター」に農園関係者と行ったとき、兄が大きな声を出したことがありました。そうしたら隣にいた男性がすぐ怒って、「お前何や！ わしは昔精神障害があつて、叫びたい気持ちを抱えながら生きてるんや！ お前もがんばれよ！」と言ったら、兄はその後ずっと黙っていました。彼がなぜ叫ぶのかを考えるべきだという話とは別に、その男性のような自分と重ねた本気の叫びは伝わるように思います。

宮下 いろいろなことを障害ということを一に決めたり、考えたりするのではなく、とにかく一緒にいることを重ねながら私自身も変化していきたいなと思います。長靴の子のお母さんは私たちにも謝っておられました。私は「大丈夫ですよ」と言いたかったのですが、逆にお母さんを追い詰めてしまったかもしれません。

猪瀬 正解はないし、マニュアル化するとまたおかしくなりますが、そういうことが起きる場合、起きたことの意味をいろいろ話し合える状態があることが大事ですよ。

宮下 地域の中にもやはりヒエラルキーがあつたり、弱者と強者がいたり、正解と不正解を必要とする人や場面がある。そのほうが人間関係がラクな面もありますが、わからないことを、このくらいか、あのくらいかと斟酌しながらもやっぱりわからずに、それでも考えながら「持ちこたえる」ほうが、人と人が一緒に生きていく感じがします。

猪瀬 答えがひとつだと、いわゆる正解を出すのが得意な人の意見しか採用されなくなり。でも答えが誰にもわからないと、いろいろな人が口出しできます。とはいえ無秩序な状態、アナキーな状況というのは、けっこうしんどいですよね。面倒くさいことも起きるわけです。そのときどう乗り越えていくかは、経験が問われるところだと思います。

ぼくは若いころに住んでいた地域で、近隣の方との間に騒音やゴミ出しをめぐるトラブルがあったことがあります。ぼく自身も隣の住民に怒られることが何度もありました。そ

れについてどうやって対応するのかというのは、なかなか正解がなく、試行錯誤しなければならぬところがあります。行政が出てきて指導したりしても、必ずしも解決にはつながりません。一方で、解決しようと思いと、毎日お互い顔を合わせなければいけない。そんな中で、子どもや猫などが間にいると、世間話をしたり、何かものを贈り合ったりする関係が生まれ、緊張がゆるむことがあります。だからといって緊張が収まるわけではないのですが、お互い微妙にやり過ぎず。ぶつかりながら折り合いをつける、ということが地域にはあり、簡単に解決できません。しんどいですが、そういう忍耐力がなくなると、ルールさえ決めれば解決できると思ってしまう。一緒に向き合い、暫定的に答えるものを出しながら次も考えていくしかないのですが。

宮下 「答え」はずっと暫定的なのかもしれないですね。

線引きを越え 共有から共用へ

猪瀬 一方で、福祉農園は県の事業なのでアナキーではありません。かといってぼくたちは下請けではなく、パートナーシップという意識で運営しています。県の事業以上の自由さは持っていますが、県を無視しているわけではなく、一緒にやっているということが重要だと思っています。そんなふうに、国や自治体などにもいろいろな主体が関われば、お互いに単独ではできないところまでやれるのではないのでしょうか。「もう行政なんかいらない」ということではなく、ときには対立しつつもやりとりしながら続けていくことが大事だと思います。

宮下 それは農園や県のためだけではなく、地域にとつての公益でもありますよね。

猪瀬 学校は、思想信条に関係なく、地域のいろいろな人がみんな通ってくる場なので、本来はそういう協働のポテンシャルがあるはずですよ。

ぼくたちの農園にも、保守から革新までさまざまな思想信条の方がいて、政治のあり方については意見の相違もありながら、農業でつながっています。社会運動や市民活動に

関わっている人たちだけでなく、経済人によって構成されるロータリークラブの人たちがいることで教えられることが多くあります。ロータリークラブはスケールとスピード感がよくらと全然違うので、議論になることもありますが。イベントとなれば200人規模の人を集める、屋台で焼きそばや肉、ビールなども提供するのですが、最初の頃は農園の野菜をまったく使っていないかったり、来ている人たちが農園がどんな場なのか知る場面が少なかったりということもあり……。こちらとしては「みんな喜んでくれるからいいだろう」とはいかないのですが、時間が経っていくと、ロータリーの人たちの視点がだんだんとわかってくる。普段は農園にこないような人が来て、町の縮図のようなものを体感すること、そこから一緒にやれることを探すということを、町をある意味俯瞰的に見ているロータリーの人には大事にしているのです。そういう出会いの中から、さまざまな取り組みも生まれていきます。だから、「やらないでくれ」「やめます」ではなく、一緒にやっていく方法を考えます。

宮下 学校と地域の連携には実はたくさん道筋があつたり、たくさんの人々がいたりする。以前、廃業する植木屋さんから広葉樹をもらい、学校に運び、園工の授業で使いました。広葉樹を相手にしたその授業の後には子どもたちが木の絵を描きました。そうしたら、ごく細かい部分に注意を向けたり、質感にフォーカスしたり、木の持つ迫力を、木の姿形を描き写すのではなく表現した子もいました。本木の樹木を用いることで、木に対する認識や木と自分の関係性が変わったのでしょうか。人間の感覚の拡張はすごいなと思いました。そんな子どもの感覚をもう少し信頼して、地域に投げかけてみるのではないかと思っています。

一方、木をいただきに行ったとき、畑の持ち主の方は、ブルドーザーで根こぎされるよりは子どもたちに使ってもらいたい、たくさん持って行ってくださいと言われました。あげる・いただくという関係だけではないものが、そこに生まれたようにも感じました。

猪瀬 開園当時から農園に参加している「わかば塾」という塾があり、そこには不登校の子や、発達障害があるとされる子どもも通っています。70代後半の方がもう50年ぐらい続けて

いる塾で、普通の民家でいつでも鍵が開いていて、カメや猫がたくさん飼われている。夏でも扇風機しかない中で、子どもたちはずっとゲームをしたり勉強したりしています。ブロックで自分の世界をつくる「メインクラフト」から一次関数を覚えてしまう子もいれば、釣りにうちこんで巨大なライギョを釣り上げてしまう子もいて、そこで子どもがすぐ育っている。そういう塾って昔はもつとありましたよね。

それから、福岡市にある「宅老所よりあい」の代表・村瀬孝生さんの話を聞いていたとき、おじいちゃん、おばあちゃんたちがいわゆる徘徊をしたがるので、職員はそれをどう防ぐかを考えるけれど、そもそも彼ら・彼女らはここで暮らしたいわけじゃないのだから当たり前だということをおっしゃっていて、本当にそうだなと思いました。わかば塾も、預けられる意識の子どもにはすくしんどい場所だと思えますが、自分で来たいと思ってくる子どもたちにとっては、この地域にどこにもない、自由で、そして自分の個が尊重される場になっている。

宮下 私は、多摩川の近くで、子どもたちが普通に土遊びをしたり、草っ原でぼんやり過ごす時間が得られるような場づくりを考えています。そこは所有者はいるけれど使われていない曖昧な場で、安全のことや地域との付き合いを考えると、大人の技量も問われます。枠組みがないからこそ開かれて、関わる人が考えたことを発現できる。そこで起こったことのへの照り返しには、社会の常識ではなく、そこにいる人がその人の価値観で対応しなければいけない。一般論に逃げない分、重たいこともあるけれど、そこでは面白いこともたくさん生まれるし、大人も変わっていきます。社会ではさまざまな線が引かれ、所有や管理が大事にされていますが、それらを1回はがしてみると、関わりしろはたくさん出てくる気がします。

猪瀬 「共有」よりも「共用」がいいですよ。所有権というのは強すぎるので、「ともに用いる」ほうに見方を変えるべきじゃないか、そのほうがより開けるんじゃないかと思います。農園もぼくらは所有しておらず、県や地主さんが持っている場所です。でも25年も「共用」しているのは、それなりなことだと思うのです。



学校に押し込まず 学校を拡散するデザイン

猪瀬 一見すると捨てられた場所やネガティブな場所が、どこかで反転してコモنزになるというのは、興味深いですよ。

宮下 もはやそういう場所しか、誰も言いたいことを言えたり、表現できたりする場がないのかもしれない。それほどまでに社会のキャパシティがなくなっているから、地域の中では学校がその役割を担わなければならない。だとしたら、学校が開くことを必要としているのは、むしろ地域のほうではないでしょうか。

猪瀬 たしかに、地域や社会の中がどんどん閉鎖されたプライベートな空間ばかりになる中で、学校がかるうじて地域の人を受け入れられるし、受け入れなければならない。障害者施設もそうですが、地域の中で実はそこにしが集まれなくなっているのは何なのだろうと思いますね。子どもの遊び場も学校にしかなくなりつつあります。そこで学校に対してセキユリティなど外の社会で必要とされることを求めたら、パシッと倒れてどこもなくなってしまう。

宮下 学校に押し込むのではなく、学校が地域のほうに拡張すればいいと思います。壁で囲われた内と外ではなく、境界をゆるくしていくことで変わらないうか。

猪瀬 学校が広がり、その中に店や施設があるデザインもあり得ると思います。昨年、神奈川県愛川町にある社会福祉法人の「春日台センターセンター」に行きました。そこはもともと「春日台センター」というスーパーマーケットで、公民館のようなものも併設されていた町の拠点だったのですが、2016年に閉じてしまった。それを再度立ち上げて、高齢者のグループホームやデイサービス、障害のある子どもたちが通う放課後デイサービスのほか、子どもたちの寺子屋、シェアオフィスなどをつくったのです。コインランドリーとコロッケスタンドもあり、デイサービスを利用するおじいちゃんや障害のある人たちが働いていたりします。

障害者施設で事件があった相模原市に隣接することもあり、施設が囲われているのはよくない、地域に開かなければという問題意識から立ち上げた。施設代表の馬場拓也さんは話していましたが、実際、福祉施設的なものと地域が混じり合う空間になっています。午後3時くらいになると、おばあちゃんおじいちゃんがいる縁側に子どもたちが帰ってきて、いつかあったような懐かしい風景になる。ああいう場が各地につくれたら希望があるような気がします。

宮下 社会の中で押し込まれて小さくなっていったものが、ぱっと弾けて広がるイメージですね。学びやケアをそれぞれの場所や施設が担うのではなく、地域が学びやケアそのものになる。学校という機能が拡張するというより、地域の中に拡散してある……そんなビジョンが浮かびます。

一方で、先日お話を伺った小学校の先生は、学校があることで子どもたちの学びや生活が守られることもあると言っておられました。いろいろな環境で生きざるを得ない子どもにとっ、学校が生きるための最後の砦になる可能性もある。単に開けばよい、というだけでなく、学校がどのような空間であるのか。開く、ということをきっかけに対話が生まれるといいですね。

つくることを考えてみよう 地域を生きる

発行日 2025年(令和7年)3月31日

制 作 特定非営利活動法人アートフル・アクション

執 筆 宮下美穂、瀧本広子(ともに特定非営利活動法人アートフル・アクション)

デザイン アサノリエコ

写 真 各校の先生方、労働者協同組合HATO文化編集部、
特定非営利活動法人アートフル・アクション (記載のあるものは除く)

編 集 労働者協同組合HATO文化編集部

発行者

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストブレイス5階
電話:03-6256-8435 FAX:03-6256-8829
www.artscouncil-tokyo.jp

本書に関するお問い合わせ先

特定非営利活動法人アートフル・アクション
東京都小金井市本町6-5-3シャトー小金井2F
TEL/FAX: 042-316-7236 mail@artfullaction.net
<http://artfullaction.net/>

*〈多摩の未来の地勢図 cleaving art meeting〉は「東京アートポイント計画」として実施しています。
東京アートポイント計画は、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出すためのさまざまな「アートポイント」
をつくるために、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が、地域社会を担うNPOとともに
に展開している事業です。実験的なアートプロジェクトをとおして、個人が豊かに生きていくための関係づくりや創
造的な活動が生まれる仕組みづくりに取り組んでいます。

主催:東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人アートフル・アクション

ISBN978-4-909894-59-5 C0070

*本書の無断複写、複製、転載を禁じます。

©2025 npo artfull action



【表紙の詩について】

本誌表紙に掲載したのは、谷川俊太郎さんの「ひとりひとり」という詩です。

本冊子中で語られる「多様性の相互承認」のためには、

承認し合う私とあなたが必要です。

私とあなたが異なっているからこそ、相互に承認し、尊重し合うこともでき、

相互にわかり合おうとすることで新しい世界も広がります。

地域と学校は異なるようで、地域の中の学校は地域自身でもあります。

詩は「ひとりひとりだから手がつなげる」ともいいます。

他者と地域とこの地で生きるウェイションを読みとることが出来ます。

ひとりひとり

ひとりひとり 違うう目と口と口をもち
ひとりひとり 同じ青空を見上げる
ひとりひとり 類と名前をもち
ひとりひとり 違う類と名前をつく
ひとりひとり 似たための息をつく
ひとりひとり 違う小さな物語を生き
ひとりひとり 大きな物語に呑みこまれる
ひとりひとり 違う考えをもち

谷川俊太郎「ひとりひとり」